福岡市埋蔵文化財調査報告書第９６３集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群９

－第２６次調査報告－

２００７

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第９６３集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群９

－第２６次調査報告－

調査番号　MOT－２６
遺跡略号　０１１０

２００７

福岡市教育委員会

1．第20次・26次調査地点を望む（北東から）（航空写真）

2．第26次調査地点（東から）（航空写真）

1．第26次調査地点Ⅱ区全景（西から）（航空写真）

2．市内出土の主な緑色系石製装身具（1/1）

序

アジアの玄関口である福岡市は、古来から対外交渉の門戸として栄えてきました。このことを物語るように、市内には数多くの遺跡が残されています。

福岡市は現在、歴史的・地理的の関係の深い国々と連携し「アジアの交流都市」を目指しています。アジアの色々な地域と学術・文化・産業・環境など様々な分野で交流を図っています。

現在、九州大学は「時代の変化に応じて自立的に変革し、活力を維持し続ける開かれた研究大学の構築」を主たる目標に掲げ、箱崎・六本松・原町地区のキャンパスを統合し世界的レベルで研究・教育拠点を創造するために福岡市西区元岡・桑原地区、前原市、志摩町にまたがる地域に移転し、新キャンパスを建設する事業を進めています。

本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のため協力支援を行うと共に、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地区におけるまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応を行っております。統合移転地内の埋蔵文化財の発掘調査もこの一環として平成７年度から教育委員会が取り組んでおります。

本書は九州大学統合移転事業に伴い実施した元岡・桑原遺跡群第26次調査の成果を報告するものです。

最後に調査を委託された福岡市土地開発公社、調査にご協力いただいた九州大学及び都市整備局大学移転対策部、並びに元岡地区・桑原地区の地元の方々をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、本書が文化財保護のより一層のご理解の一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長　植木　とみ子

例　言

1．本書は、九州大学統合移転事業に伴い、事前の発掘調査を実施した福岡市西区大字桑原地区に所在する元岡・桑原遺跡群の発掘調査報告書である。

2．発掘調査・整理報告に関しては、福岡市土地開発公社と委託契約を締結し、福岡市教育委員会が、2001年に行った元岡・桑原遺跡群第26次調査の報告書である。

3．本書で報告する元岡・桑原遺跡群第26次調査の略号はMOT－26、調査番号0110である。

4．発掘調査で検出した各遺構は、その種類ごとに記号を付し、竪穴住居址をSC、掘立柱建物をSB、溝状遺構をSD、土壙をSK、伏焼土壙をSO、護岸状遺構をSG、ピットをPitと表記した。

5．本書に使用した遺構実測図の作成は、二宮忠司、大庭友子、西村直人、小杉山大輔、石橋忠治、水崎るり、吉岡員代、小山不志代が行い、遺物の実測は大庭が行った。拓影は牛尾美保子、海内美也子、武田祐子が行った。トレースは大庭が行った。

6．鉄器に関しては、埋蔵文化財センターの比佐陽一郎が分析・原稿・写真を受け持った。

7．福岡市埋蔵文化財調査報告書909集に掲載した第27次調査出土遺物Fig.30-23遺物番号(10053)・24遺物番号(10052)の石材分析を比佐陽一郎が行った。その結果を報告する。

8．本書に使用した写真は、空中写真を(株)写植エンジニアに委託し、他は二宮、大庭が行った。

9．本書に使用した座標は国土座標Ⅱ系を使用した。

10．第26次調査の執筆及び編集は、二宮、大庭が行った。

11．第26次調査に関する調査記録・出土遺物類は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管する予定である。

元岡・桑原遺跡群第26次調査

遺跡調査番号	遺跡名	所在地	調査年月日	調査対象面積	調査面積
0110	元岡・桑原遺跡群26次	福岡市西区大字桑原字戸山472外	H13.4.6～H13.11.30	5,487㎡	5,487㎡

遺跡略号	分布地図番号	遺跡番号	検出遺構
MTO－26	西部Ⅱ　桑原129	2782	古墳時代、奈良時代、平安時代

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに ……1
1　調査に至る経緯 ……1
2　調査組織 ……1
第Ⅱ章　調査の記録 ……7
1　調査概要 ……7
2　検出遺構 ……9
1）古墳（1号墳） ……9
2）住居址（SC） ……12
3）掘立柱建物（SB） ……13
4）土壙（SK） ……21
5）護岸状遺構（SG） ……21
6）溝状遺構（SD） ……21
3　出土遺物 ……23
1）遺構出土の遺物 ……23
2）包含層出土の遺物 ……31
3）鉄器・石器・土錘・鉄滓・篦記号のある土器 ……41
4　元岡・桑原遺跡群第27次調査出土石製小玉の石材について ……45

挿 図 目 次

Fig. 1　元岡・桑原遺跡群位置図（縮尺1/50,000） ……2
Fig. 2　第26次調査区と周辺遺跡（縮尺1/4,000） ……3
Fig. 3　第26次と他の調査区の位置図（縮尺1/2,000） ……4
Fig. 4　第26次調査Ⅰ区遺構配置図（縮尺1/400） ……5
Fig. 5　第26次調査Ⅱ区遺構配置図（縮尺1/400） ……6
Fig. 6　Ⅰ区第1号墳平面・断面、遺物実測図（縮尺1/3,1/40） ……8
Fig. 7　SC－01～05住居址実測図（縮尺1/60,1/80） ……10
Fig. 8　SC－01・03・04、SK－04実測図（縮尺1/80） ……11
Fig. 9　掘立柱建物－1（SB－01～03）実測図（縮尺1/80） ……14
Fig. 10　掘立柱建物－2（SB－04・05・07・08）実測図（縮尺1/80） ……15
Fig. 11　掘立柱建物－3（SB－10～12）実測図（縮尺1/80） ……16
Fig. 12　掘立柱建物－4（SB－06・09）、SK－01・02実測図（縮尺1/20,1/40,1/80） ……18
Fig. 13　護岸状遺構（SG）実測図（縮尺1/40） ……19
Fig. 14　SD－01・02、SK－03、Pit65・94実測図（縮尺1/20,1/40,1/80） ……20
Fig. 15　出土遺物－1（SC－01・03・04）実測図（縮尺1/3） ……22
Fig. 16　出土遺物－2（SC－02）実測図（縮尺1/3） ……24
Fig. 17　出土遺物－3（SC－02）実測図（縮尺1/3） ……26
Fig. 18　出土遺物－4（SC-02,SK－03）実測図（縮尺1/3） ……27
Fig. 19　出土遺物－5（Pit出土）実測図（縮尺1/3） ……28
Fig. 20　出土遺物－6（包含層出土－1）実測図（縮尺1/3） ……30
Fig. 21　出土遺物－7（包含層出土－2）実測図（縮尺1/3） ……32
Fig. 22　出土遺物－8（包含層出土－3）実測図（縮尺1/3） ……33
Fig. 23　出土遺物－9（包含層出土－4）実測図（縮尺1/3） ……34
Fig. 24　出土遺物－10（包含層出土－5）実測図（縮尺1/3） ……35
Fig. 25　出土遺物－11（包含層出土－6）実測図（縮尺1/3） ……36

Fig. 26　出土遺物－12（包含層出土－7）実測図（縮尺1/3）……38
Fig. 27　出土遺物－13（包含層出土－8）実測図（縮尺1/3）……40
Fig. 28　出土遺物－14（石器）実測図（縮尺1/2,1/3）……42
Fig. 29　出土遺物－15実測図（縮尺1/2）……43
Fig. 30　小玉実測図（縮尺1/1）……45
Fig. 31　市内出土石製装身具の分析チャート……48

巻頭図版目次

巻頭図版1　1第20次・26次調査地点を望む（北東から）（航空写真）　2第26次調査地点（東から）（航空写真）
巻頭図版2　1第26次調査地点Ⅱ区全景（西から）（航空写真）　2市内出土の主な緑色系石製装身具（1/1）

図　版　目　次

PL. 1　1. 元岡・桑原遺跡群第20・26次調査地点（航空写真）（北東から）
　　2. 第26次調査区全景（航空写真）（西から）
PL. 2　1. 第26次調査地点Ⅱ区全景（航空写真）(東から)　2. 第26次調査Ⅰ区検出第1号墳（東から）
PL. 3　1. Ⅰ区第1号墳左側壁部（東から）　2. 第1号墳右側壁部（西から）
PL. 4　1. 第26次調査Ⅱ区全景（東から）　2. 第26次調査Ⅱ区第三段目全景（東から）
PL. 5　1. Ⅱ区SC-01・03・04、SK-04全景（北から）　2. SC-01・03・04全景（北から）
PL. 6　1. SC-01・03・04近景（北から）　2. SC-04竈近景（東から）
PL. 7　1. SC-01竈近景（東から）　2. SC-01・04切合関係と竈近景（北から）
PL. 8　1. SB-02他検出状態（南西から）　2. SC-02・05、SB-01検出状態（南から）
PL. 9　1. SB-03他検出状態（南から）　2. SC-02・05、SB-01検出状態（北から）
PL. 10　1. SB-04検出状態（北から）　2. SB-05・06・07、SD-01他検出状態（北から）
PL. 11　1. SB-06検出状態（北から）　2. SB-02・07検出状態（北から）
PL. 12　1. SB-08・09、pit-94他検出状態（北から）　2. SC-01、SD-02、SB-08・09他検出状態（北から）
PL. 13　1. 護岸状遺構、SB-10検出状態（南東から）　2. 護岸状遺構全景（北西から）
PL. 14　1. SD-01、SB-05、Pit-65他検出状態（西から）　2. SK-01完掘状態（南西から）
PL. 15　1. SK-02（石蓋土壙）検出状態（西から）　2. SK-04検出状態（北から）
PL. 16　出土遺物－1（縮尺1/4）
PL. 17　出土遺物－2（縮尺1/4）
PL. 18　出土遺物－3（土器は1/4、石器は1/2、265は1/1）
PL. 19　出土遺物－4（縮尺1/4）
PL. 20　出土遺物－5（土器・鉄滓は1/4、鉄器・土錘は1/1）

表　目　次

Tab. 1　元岡・桑原遺跡群第26次調査鉄滓一覧表……44
Tab. 2　今回の分析で石材が推定された市内出土玉類一覧……44

付　図

元岡・桑原遺跡群第26次調査遺構全体図（1/1,000）

第Ⅰ章　はじめに

1．調査に至る経緯

平成６年２月、九州大学から福岡市に新キャンパス大学統合移転用地の取得の依頼があり、同３月、福岡市、九州大学、福岡市土地開発公社は用地取得について覚書の締結がなされた。事業用地は土地開発公社が福岡市に代わり先行取得し、新キャンパス建設のための造成工事を行うこととなった。造成工事に先立ち、平成７年２月九州大学から福岡市に対して事業用地内埋蔵文化財の事前調査の依頼があったことから、土地開発公社と福岡市の間で委託契約を締結して事業地内の埋蔵文化財の踏査を実施した。平成７年12月、用地の275ｈａの踏査が終了した。平成８年３月九州大学・福岡市・土地開発公社間で「造成に関する覚書」が締結され、その中で土地開発公社は「事業用地の造成の調査に関して埋蔵文化財調査等を行うものとする」との一項が盛り込まれたことから以後、埋蔵文化財の調査に関しては土地開発公社と福岡市の間で委託契約を締結して事業を進めることとなった。

2．調査組織

調査委託　福岡市土地開発公社

調査主体　福岡市教育委員会

教育長　（現任）植木とみ子　（前任）生田征生　西憲一郎

文化財部長　（現任）山崎純男　（前任）堺　徹　柳田純孝　平塚　克則

組織変更により調査庶務は文化財整備課から文化財管理課へ

調査庶務　文化財管理課

文化財管理課長　（現任）榎本精治　（前任）平塚義行　上村忠明

管理係長　（現任）栗須ひろ子　（前任）市坪敏郎　井上和光

管理係　（現任）河野寛　鳥越由紀子　鈴木由香　後藤泰子　山本朋子

（前任）中岳圭　岩屋淳美

組織変更により大規模事業担当は埋蔵文化財第２課へ

調査担当　埋蔵文化財第２課

埋蔵文化財第２課長（現任）力武卓治

第１係長（現任）池崎穣二

第２係長（現任）米倉秀紀

池田祐司　上角智希　木下博文

旧大規模事業担当

課長（前任）二宮忠司　山崎純男

主査（前任）濱石哲也　松村道博　池崎穣二

屋山洋　菅波正人　吉留英敏　星野恵美　松浦一之介

小林義彦　久住猛雄

調査補助　大庭友子　小杉山大輔　西村直人　石橋忠治　水崎るり

調査調整　都市整備局大学移転対策部

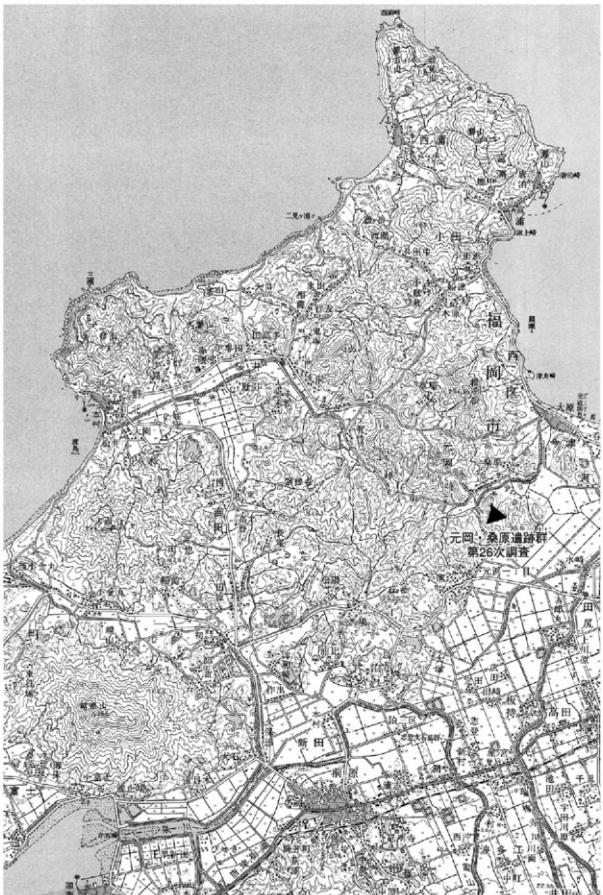


Fig. 1　元岡・桑原遺跡群位置図（縮尺1/50,000）

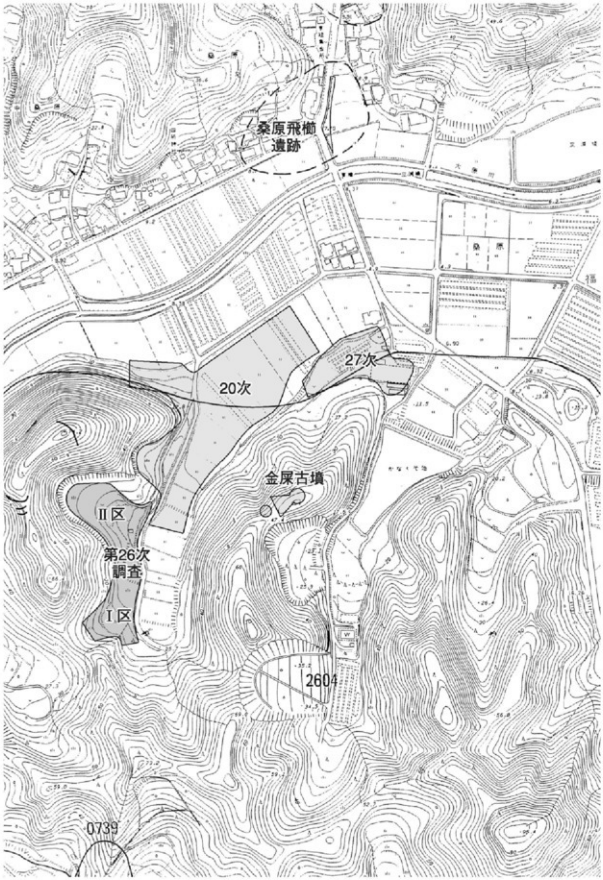


Fig. 2　第26次調査区と周辺遺跡（縮尺1/4,000）

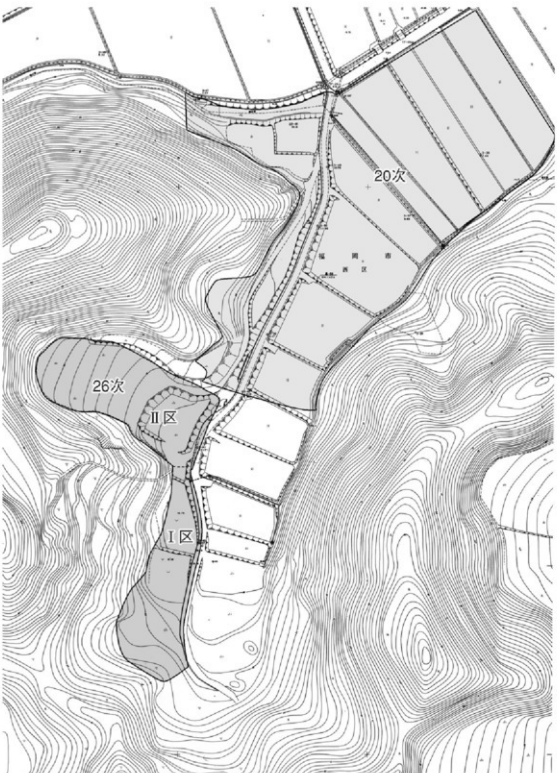


Fig. 3　第26次と他の調査区の位置図（縮尺1/2,000）

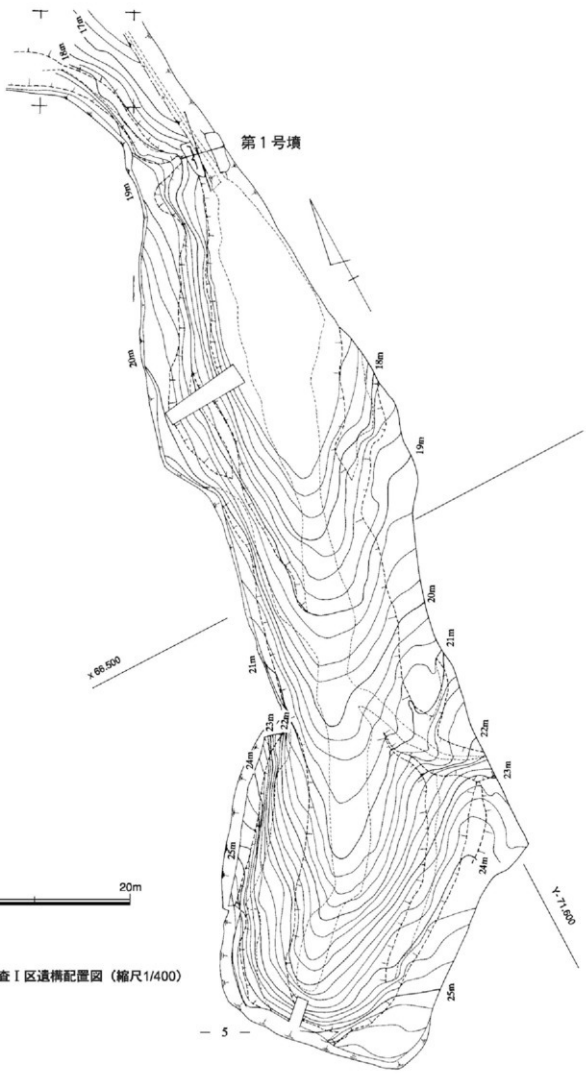


Fig. 4　第26次調査Ⅰ区遺構配置図（縮尺1/400）

Fig. 5　第26次調査Ⅱ区遺構配置図（縮尺1/400）

第Ⅱ章　調査の記録

1．調査概要

調査番号：０１１０　　調査略号：ＭＴＯ－26

調査対象地：福岡市西区大字桑原字戸山472外

調査期間：平成13年４月６日～平成13年11月30日

調査面積：5,487㎡

調査区は北緯33° 35′ 52″、東経130° 13′ 43″に位置し、国土地理院1:50,000前原で左上から右に42.2cm、下に15.2cmの部分を中心とした5,487㎡を調査範囲とした。座標は公共座標を使用し、座標の範囲はＸ軸66,400～66,700、Ｙ軸-71,500～-71,700で、中心軸はＸ66,600とＹ-71,6900である。

調査地点は事業地の東側、第20次調査の西側、戸山城の南側斜面に位置する。調査地は南北に延びる斜面（2,045㎡）Ⅰ区と東西の谷部（3,442㎡）Ⅱ区を調査対象とした。この調査は第２０次調査で古墳時代～奈良時代にかけての大集落が発見されたことと、奈良時代の掘立柱建物群、青磁、墨書土器と共に「大宝元年」銘のある貴重な木簡や地名を表す木簡が出土したことで、九州大学の考古専門部会で保存が検討され、計画変更を伴った事前の確認調査であり、遺構検出によっては保存対象地の拡大及びその範囲を確定する調査であった。

遺構の概略を述べる。

古墳

Ⅰ区とⅡ区との境の道路部分から検出した。天井部、側壁等は抜き取られ、かろうじて西側側壁が２枚残っていた。床面もあらされ，中央部は側溝工事によって破壊されていた。

古墳時代竪穴住居址

Ⅱ区東側端から竪穴式住居址３軒、西側から２軒を検出した。東側から検出した住居址は見事に重なり合い、西側の２軒も切り合い関係が認められる。１軒の大きさは、約3.2mの方形と約3.5mの方形で、時期的には非常に近い時期であることが、出土遺物から窺える。

掘立柱建物

幅約35m、奥行約70mの中に掘立柱建物12棟が検出された。１×１間が５棟、１×２間が３棟、２×２間が１棟、２×３間が２棟である。柱穴自体は50～80cmであるが、柱痕は20～30cm程度で大型のものはない。

伏焼土壙

北西の奥部に１基検出した。壁面の全面は赤褐色に堅く焼けている。大きさは長軸2.5m、短軸1.3m、深さ0.3mを測る。周辺部にも焼けた痕跡のある土壙が見られ、炭焼き窯状の遺構と考えられる。覆土から須恵器の破片が出土している。東側端にも１基検出した。壁面はあまり焼けていない。大きさは長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.5mを測る。

護岸状石組遺構

第１段目の段造成部分に幅５m、高さ0.7mで石組を行っている。他の部分は約50～80cmの段差があるが、緩やかな段造成であるのに対して石組部分はほぼ垂直である。出土遺物はないがSB-10を切る形で造築していることから古墳時代以降と考えられる。

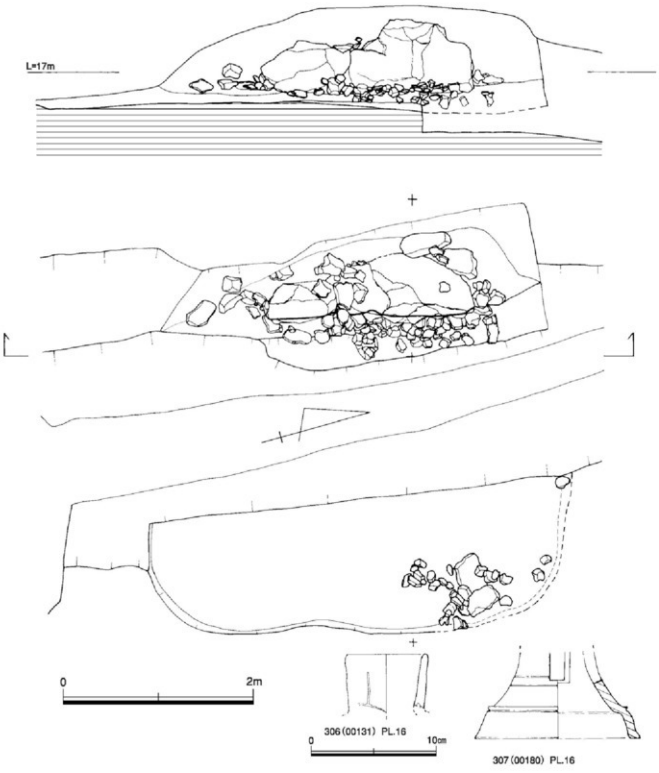


Fig. 6 Ⅰ区第1号墳平面・断面図、遺物実測図（縮尺 1/3,1/40）

2．検出遺構

調査は平成13年４月6日から開始した。まず、南北に延びる西側斜面であるⅠ区の調査から開始した。この南北に延びる斜面Ⅰ区には遺構の検出は認められなかった。Ⅰ区とⅡ区の境で、用水路によって破壊された古墳１基を検出した。Ⅱ区の東西調査区は、平成７年の踏査・試掘調査の結果、この地点は遺構が確認されており、時代も弥生時代から平安時代の遺構との所見であった。表土剥ぎで試掘調査トレンチを確認した。土層で確認すると約三面の遺構が重なっていることが判明した。

調査区は西が高く、東が低いが、丁度南から北へ緩やかな斜面となる部分に谷状に開けた南北40m、東西100mの平坦地である。しかし、後世の開拓で段状に削平されており、西側はかろうじて残っているが、東側はかなりの削平を受けていた。第一面は西側の奥に平安時代と思われる遺構、中段に奈良時代の遺構、掘立柱建物が12棟、溝状遺構が4条、古墳時代中期の竪穴式住居址５軒が検出された。東側部分は急激に谷部に段落ちするため遺構は少なかった。第二面は西側トレンチで古墳時代の遺構が検出されており、第三面には弥生時代の遺物が出土しているが、遺構は確認できなかった。今回は遺構確認調査であり、第一面の遺構のみを検出することにとどめ、第20次との繋がりが明らかとなったことから第Ⅰ面で調査を終了した。この結果を九州大学考古学専門部会に報告し、専門部会で、20次とともに保存処置を施すことに決定したため、保存のための盛土を行い調査を終了した。

1）古墳（1号墳）（Fig.４・６，PL.２-２,３-１・２）

Ⅰ区とⅡ区との境の道路部分から検出した。天井部、側壁等は抜き取られ、かろうじて西側側壁が２枚残っていた。床面もあらされ、中央部は側溝工事によって破壊されていた。主軸は座標軸　X66.54385、Y-71.59643に位置し、破壊が著しく床石も現状を保っていたものは少ない。東側には裏込め石だけが残り、石室自体の掘方も削平されていた。掘方は西側が高く、東側が平坦であるため、西側を現状で約1.1m掘り下げている。形態的には北側に石室、南側に羨道部を設ける横穴石室である。掘方は4.1×4.4mで、ほぼ正方形を呈すると思われる。地形の形状から西側を方形に削りだし、南西側は、なだらかであるが、墓道を形成する削平が行われている。これに対し、東側の奥壁部分は削平され、かろうじて東側一部に裏込め石の残骸が残っている程度であった。石室の形状も定かでないが、2.5×2.5mの正方形に近く左側壁部の奥壁と接する石（高さ1.0m、横幅1.4m、厚さ07m）と羨道部に近い石（高さ0.7m、横幅1.0m、厚さ0.4m）の二石だけが残存していた。この残存する二石は石室内部の左側壁部で、この後羨道部が続くと考えられ、古墳の大きさは推定８m前後と考えられる。石の大きさから大型の石材を使用したと思われ、後期古墳によく見られる形状である。出土遺物からも６世紀後半の古墳である。

この古墳の北側の保存対象地区に大型の円墳が１基ある。今回の古墳が残存したことで、この周辺に数基の円墳が存在した可能性が高くなった。

出土遺物（Fig.６，PL.16）

Fig.６に２点図示した。破壊が著しいため出土遺物はこの２点だけである。床石も元位置を保っているものが少なく、この２点はかろうじて敷石の間から出土したものである。

306（00131）平瓶の口縁部である。胴部以降は無いが、外面に篦記号を配する。口径6.7cmを測り、口縁部高は4.7cmである。色調は内面が淡暗黒色、外面が暗黒色を呈する。

307（00180）脚部中央部に長方形の透かしを配する高坏の脚部と思われる。底径13.2cmで、底辺から2.1cm上に沈線を巡らし、すぐ上部に三角突帯を配する。脚部中位に二条の沈線を巡らすが、上部一条は長方形の透かしによって切られる。透かしは三方向に配する。色調は内面が淡暗黒色、外面が暗黒色を呈する。

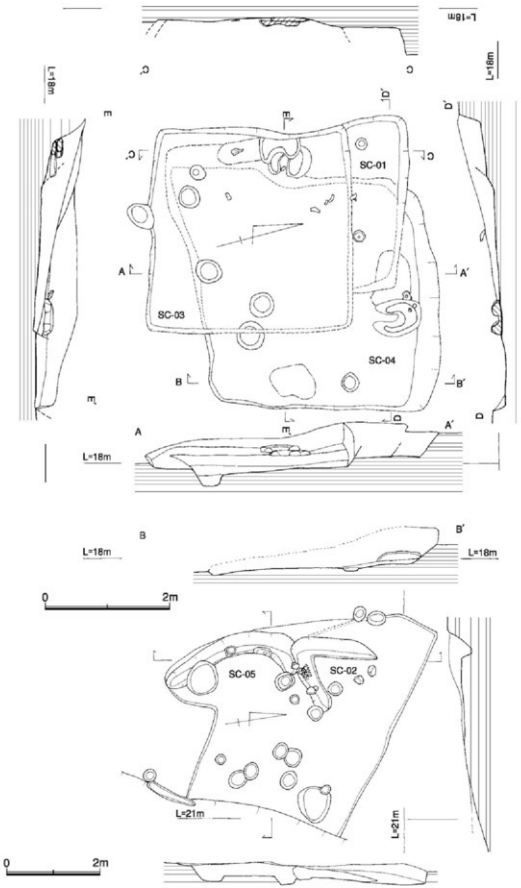


Fig. 7　SC-01～05住居址実測図（縮尺 1/60,1/80）

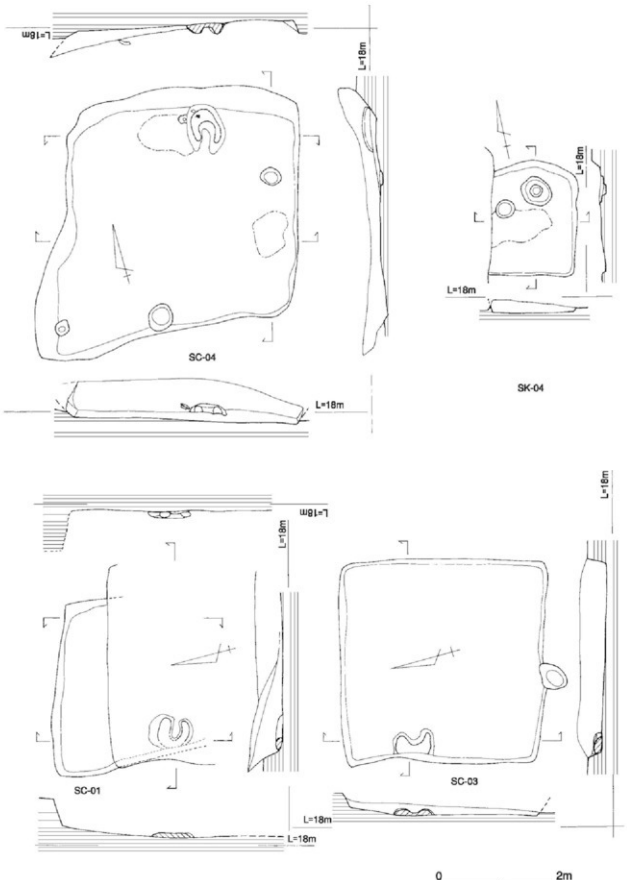


Fig. 8　SC-01・03・04、SK-04実測図（縮尺 1/60）

2) 住居址（SC）（Fig.5・7・8　PL.4～9）

Ⅱ区から古墳時代の住居址が5軒検出した。SC-01・03・04は調査区の北東部の一番東側から検出された。北側は岩盤に近い堅い層を刳り貫いており、谷部の先端部にある。SC-02・05は調査区の中央部よりやや東の南側に位置する。SC-02・05は形状が定かではなく、当初は1軒の住居址だけと思って調査していたが、SC-02（SC-05）の中央部に壁溝が検出され、別個体の住居址として判断した。そのため出土遺物は当初SC-02で取り上げていたものが殆どで、床面近くで区別した。形状はSC-02が不揃いの形状を呈するが、上部構造は削平された状態で、特に02は南西隅しか検出されなかった。

SC-01（Fig.5・7・8・15　PL.4～7）

北東隅から検出した。SC-03から切られ、SC-04を切る状況で検出された。南側をSC-03によって削平されているが、北側の東西はかろうじて検出されている。この部分の長さは2.8mを測るが、おそらく南北も同程度で、正方形に近い形状を呈するものと考えられる。柱穴が2穴確認でき、東西にあることからおそらく4本柱と考えられる。北から2mの西壁に竈が設置されている。この竈は、SC-03の竈の下から検出された。煙孔等は発見できなかった。竈は長さ0.7m、幅0.5m、高さ0.05m、竈の中央部が0.15m程開くが、奥行き0.35mで、凹みを持つ馬蹄形を呈する竈である。これはSC-03の竈の下に位置している。これからもSC-01がSC-03より古いことが伺える。北側の壁高は0.6mと高いが、本来の高さより約10～20cm程度低いと思われる（第27次調査で検出された住居址は90cm程度残存していた）。斜面を利用し西側を深く、東側を低く整地したものと思われる。出土遺物はFig.15の1～13であるが、3・4を除けばほぼ同時期を示し、古墳時代中期と考えられる。

SC-03（Fig.5・7・8・15　PL.4～6）

SC-01・04を切る形で検出した。西側壁はSC-01と一直線上に並び、一時はSC-01がSC-03の張出部とも考えたが、SC-03の竈下部からもう一つの竈を検出したことで、SC-01がSC-03から切られていることが判明した。西側・北側が高く、北側は地山である花崗岩バイラン土を削出している。東側は斜面の下側であるため、かなりの削平を受けている。西側と東側の高低差は0.85mあり、南北の高低差は0.55mを測る。3.2×3.25m、深さ0.4mのほぼ正方形の形状を呈する竪穴住居址である。西側壁の中心よりやや北側に竈を配し、若干の灰原を持つ。竈の大きさは0.6×0.4m、厚さ0.1mで、SC-01程ではないが、0.15m内に入る馬蹄形を呈する。柱穴は切り合い関係、整地層のため発見できなかった。出土遺物はFig.18の75～84であるが、SC-01・04の遺物と接合できるものがあり、また、当初は2軒の住居址と考えていたため遺物が混乱している。このためFig.15の11・13・20・21・24・27～29も同じ住居址からの出土と考えておく必要がある。81と82を除いて同時期を示す。

SC-04（Fig.5・7・8・15　PL.4～7）

SC-04はSC-01・03から切られた状況で検出した。同じ場所に三軒の切合関係があり、新しい順から03→01→04である。01・03から切られているため全容は定かでないが、南西部が外側に張り出した形状を呈すると思われる。この形状は、床面精査の時にわずかながら検出した。東西はかろうじて検出されている。長さ2.8mを測るが、おそらく南北も同程度で、正方形に近い形状を呈するものと考えられる。柱穴が東と南に2穴確認できたが、他には検出されていない。中央部からやや東の北壁に竈が設置されている。煙孔等は発見できなかったが、形状は長方形を呈する馬蹄形である。竈は長さ0.8m、幅0.6m、高さ0.05m、竈の中央部が0.15m程開くが、奥行き0.5mで、凹みを持つ馬蹄形を呈する竈である。西側に炭化物を多く含む灰原がある。Fig.15-7の遺物は竈内から出土した。

北側の壁高は0.8mと高いが、南側は削平され0.05cm程度である。出土遺物はFig.15の5～7、22～24、27・28であるが、切合関係からSC-01・03の遺物も考慮に入れる必要があるが、Fig.15-12～17を除けばほ

ぼ同時期を示し、古墳時代中期と考えられる。

SC-02・05（Fig.5・7・16～18　PL.4・8・9）

調査区第3段目の中央部南隅、南側は急傾斜地で、かろうじて西側の斜面に壁溝が検出した。又、SB-01が上部遺構として検出されている。SC-02・05は当初、住居址1件と思いSC-02で遺物を取り上げていたが、床面近くで、壁溝が検出され、切合関係が判明したため、急遽SC-05の住居址番号を付した。このことから出土遺物はSC-02の遺物が多量で、SC-05の遺物は少量しかないことになったが、時間的差はあまりないものと考察できる。壁溝から、SC-02がSC-05を切る形で検出された。両方とも削平が著しく全容は不明である。壁溝の長さはSC-02が2.8mを測り、SC-05が3.2mである。SC-02はほぼ直角に折れ曲がるが、SC-05は緩やかなカーブを有している。住居址の形状は定かではないが、SC-02は方形、SC-05は隅丸方形を呈すると考えられる。竈、柱穴は検出できなかった。出土遺物はFig.16～18の30～75であるが、38～41、44～46、52を除けばほぼ同時期を示し、古墳時代中期と考えられる。

3)　掘立柱建物（SB）（Fig.5・9～12　PL.8～14）

12棟の掘立柱建物が検出された。柱穴はまだたくさんあるが、精査すればもう少し増えるかもしれない。ただ、明治から昭和にかけてみかん畑の耕地整理によって段差が造られ、又、南・北・西と急斜面で、東部分だけが開口している。調査区の西側から東側の比高差は12mで、調査区東端からさらに谷部を形成するが、その谷部に位置する第20次の遺構部分との比高差は8mある。これらの畑の額ほどの土地を段造成して建物を配置しているが、これは、当時古墳時代の住居址があり、ある程度平坦部であったことが窺える。しかし、現状は東にいくほど削平され、また、水の流れも南・北・西側から流れてくる土地の傾斜があることから、かなり削平を受けている。掘立柱建物は1×1間が3棟、1×2間が6棟、2×2間が1棟、2×3間が2棟である。時期的には切り合い関係もあるが、古墳時代、奈良時代から平安時代に納まると考えられる。

SB-01（Fig.5・9　PL.8-2・9-2）

中央部南端に位置するSC-05を切る形で検出した。主軸の方向は、N-72°-Wで、1×2間である。東側が大きく削られ比高差は28cmある。柱穴に大小あるが、掘方が残るものと柱痕だけのものとがある。大きさは24～80cm、平均の深さは10～30cmである。北側梁行1.8×1.8mと南側1.7×1.7m、桁行2.2mで多少いびつな感じがする。出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、奈良～平安時代と考えられる。

SB-02（Fig.5・9　PL.8-1・11-2）

SB-02は他遺構との切合い関係はない。SB-01の西側に主軸の方向、N-33°30′-Wで建っている。規模は2×3間で、梁行4.88m、桁行3.4m。柱間は梁行側が1.5m間隔、桁行側が1.8mの間隔である。梁行の中間部にも柱穴を配するが、中央線より東に配列している。SB-02も東側が大きく削られ比高差は40cmある。柱穴の大きさは、ほぼそろっている方である。ほぼ掘方が残るが、内部に柱痕が認められるものは30cm内外の大きさである。掘方の大きさは40～100cm、平均の深さは20～60cmで、ほぼ揃っている。出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、奈良～平安時代と考えられる。

SB-03（Fig.5・9　PL.9-1）

三段目の段落ち部分で、南側に位置し、切り合い関係はない。主軸の方向は、N-60°30′-Wで、規模は1×2間である。梁行2.8m、桁行2.5m。柱間は梁行側が1.4m間隔である。東側が大きく削られ比高差は56cmある。柱穴はほぼ揃い方形か円形である。柱痕が残るものがあり径は24cmを測る。掘方の大きさは64～100cm、平均の深さは40～50cmである。出土遺物は少量出土している。実測に堪える物

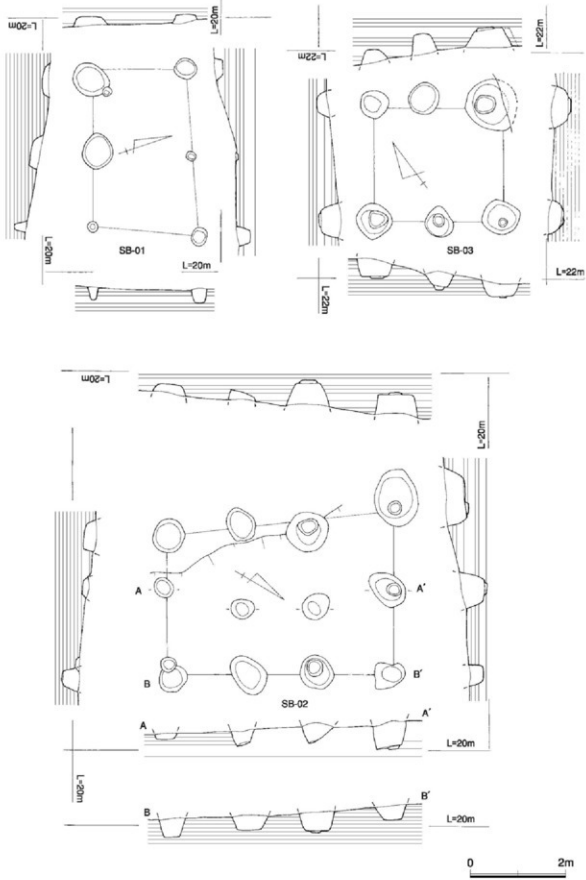


Fig. 9　掘立柱建物－１（SB-01～03）実測図（縮尺 1/80）

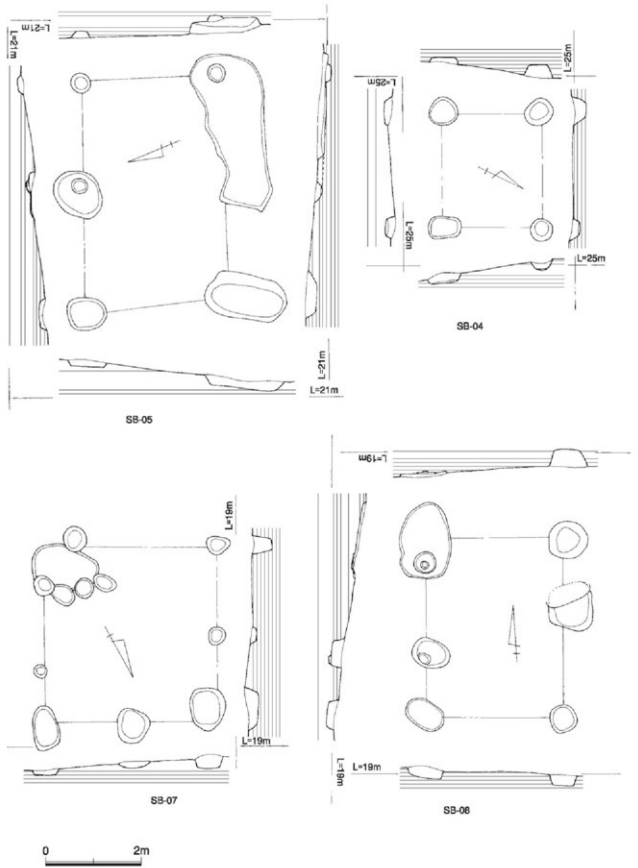


Fig.10　掘立柱建物－２（SB-04・05・07・08）実測図（縮尺 1/80）

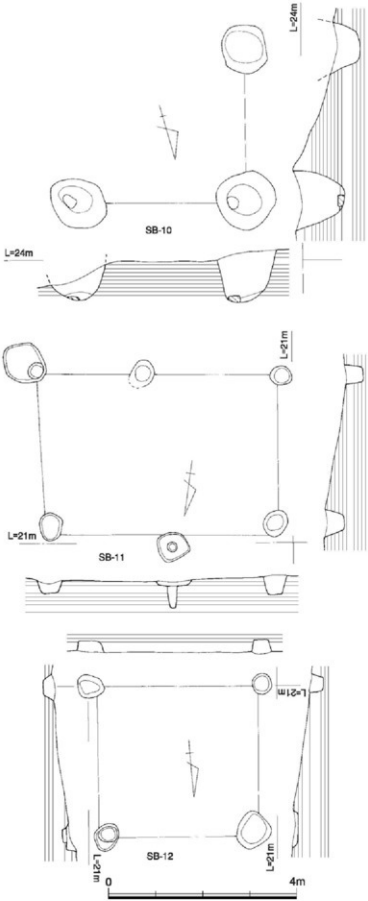


Fig.11　掘立柱建物－３（SB-10～12）
実測図（縮尺 1/80）

はないが、奈良～平安時代と考えられる。

SB-04（Fig.５・10　PL.10-１）

二段目北側のわずかに傾斜した部分で、検出した。切り合い関係はない。主軸の方向は、N-119°30′-Wで、規模は１×１間である。東側が大きく削られ比高差は50cmある。柱穴はほぼ揃っている。大きさは44～60cm、平均の深さは20～30cmである。梁行2.2m、桁行2.4mである。竪穴住居址の可能性もある。出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、古墳時代と考えられる。

SB-05（Fig.５・10　PL.10-２・14-１）

三段目の上部の北側部分SD-01の南側に位置する。SB-06との切り合い関係がある。SD-01が雨落溝の可能性を持つ。主軸の方向は、N-81°-Wで、規模は１×２間である。梁行4.92m、桁行3m。柱間は梁行側が2.7×2.22mと不揃いである。東側が大きく削られ比高差は48cmある。柱穴は大小あるが、南側は大きな掘方により南東と南側の柱穴を兼用している。柱痕が残るものがあり径は36～38cmを測る。掘方の大きさは60～340cm、平均の深さは18～46cmである。北側に位置するSD-01が雨落溝可能性も考えられるが、最も重要な西側には検出できなかったことから、明確な判断はできなかった。ただ、梁行に沿っていること、浅い溝であることからその可能性も否定できない。出土遺物は少量出土しているが、実測に堪えるものはないが、土師器片が出土していることから奈良時代と考えられる。

SB-06（Fig.５・12　PL.10-２・11-１）

SB-05との切り合い関係がある。SB-05は棟を東西に配したのに対し、SB-06は南北に棟を配置する。主軸の方向、N-29°-Eで、規模は２×３間である。梁行6.6m、桁行3.2m。柱間は西側梁行が1.9×2.5×2.2m、東側が1.8×2.4×2.4m、桁行側が1.4×1.8mの間隔である。南側、東側が大きく削られ南側の比高差は50cm、東側の比高差は40cmある。柱穴の大きさは、大小あるが、南・東側も殆どが下部の掘方及び柱痕だけが残っている現状である。掘方で大きいものは1.4mもある。

柱痕が残るものがあり、径は22～30cmを測る。現状での深さは18～32cmである。出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、奈良～平安時代と考えられる。

SB-07（Fig. 5・10　PL.10-2・11-2）

第三段目平坦部の中央部に位置するトレンチ西北側から検出した。SB-11・12との切合関係がある。SB-06南側に位置し、２×２間で、梁行2.5m、桁行2.5mを測る。主軸の方向はN-86°30′-Wで、柱間は梁行が1.7×1.8m、桁行が1.6×1.9mの間隔である。全体的に削られてはいるが、東側の比高差は30cmと比較的削平は緩やかである。柱穴の大きさは、大小あるが、南・東側も殆どが下部の掘方及び柱痕だけが残っている現状である。掘方で大きいものは1.4mもあるが、他は柱穴の大きさは80cmと揃っている。出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、奈良～平安時代と考えられる。

SB-08（Fig. 5・10　PL.12）

第三段目平坦部の中央部に位置するトレンチ中央北側から検出した。SB-09との切合関係がある。SB-11南側、SB-09東側に位置している。１×２間で、梁行3.7m、桁行2.9mを測る。主軸の方向はN-89°-Wで、柱間は、梁行東側が2.2×1.5m、西側が1.3×2.0mの間隔である。全体的に削られているが、南東側の比高差は70cmと著しい。柱穴の大きさは、ほぼ揃っているが、大きいものは、150cmある。他は70～90cmである。柱根が残るが、径16cmである。ただ西側にもう１間伸びる可能性がある。出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、奈良～平安時代と考えられる。

SB-09（Fig. 5・12　PL.12）

第三段目平坦部の中央部に位置するトレンチ中央北側から検出した。SB-08との切合関係がある。SC-01・03・04西側に位置している。１×２間で、梁行3.2m、桁行3.2mを測る。主軸の方向はN-105°-Wで、柱間は、梁行南側が1.4×1.8m、北側が1.5×1.7mの間隔である。全体的に削られているが、南側の比高差は60cmと著しい。柱穴の大きさは、70cmとほぼ揃っている。形状は隅丸方形か円形である。柱痕跡が残るものがあり、径20～28cmである。出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、奈良～平安時代と考えられる。

SB-10（Fig. 5・11　PL.13-1）

第二段目の段上に構築されている護岸状遺構の北側から検出した。護岸状遺構との切合関係がある。１×１間と考えられる。４本の柱穴のうち南東隅の柱穴が護岸状遺構によって削平されている。梁行3.2m、桁行3.5mを測る。主軸の方向はN-75°-Wである。全体的に削られているが、東南側の比高差は80cmと著しい。柱穴の大きさは、100～130cmとほぼ揃っている。形状は円形である。柱痕跡が残るものがあり、径25cmである。出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、古墳時代の住居址の柱痕跡か掘立柱建物と考えられる。

SB-11（Fig. 5・11）

第三段目平坦部の中央部に位置するトレンチ中央北側から検出した。トレンチにより中央柱穴は削平されているが、トレンチを跨ぐ形で検出された。SB-07・12との切合関係がある。１×２間で、梁行5.2m、桁行3.3mを測る。主軸の方向はN-99°-Wで、柱間は、梁行南側が2.2×3m、北側が2.3×2.5mの間隔である。しかし、柱間の間隔が広すぎることから、２×３間の可能性もある。全体的に削られているが、南側の比高差は30cmと比較的緩やかである。柱穴の大きさは、40～70cmとほぼ揃っている。形状は隅丸方形か円形である。柱痕跡が残るものがあり、径20～30cmである。出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、奈良～平安時代と考えられる。

SB-12（Fig. 5・11）

SB-07・11との切合関係がある。１×１間で、梁行3.0m、桁行3.1mを測る。主軸の方向はN-86°-Wで、

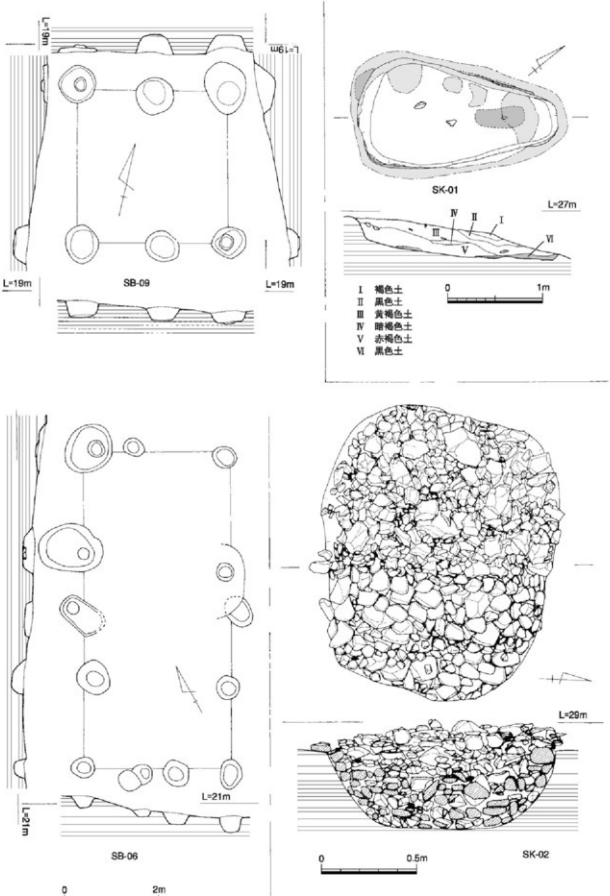


Fig.12　掘立柱建物－４（SB-06･09）、SK-01・02実測図（縮尺 1/20,1/40,1/80）

Fig.13　護岸状遺構（SG）実測図（縮尺 1/40）

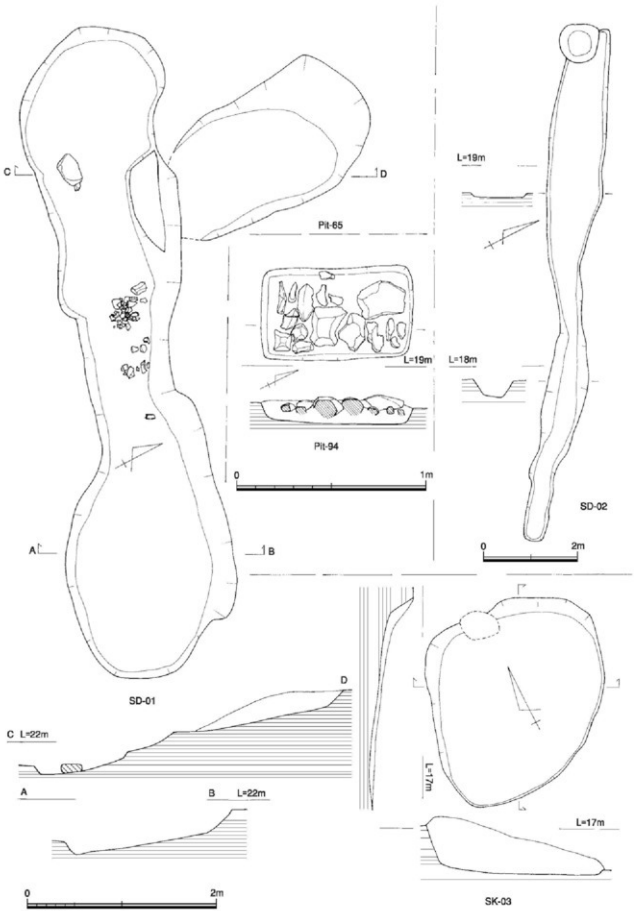


Fig.14　SD-01・02、SK-03、Pit-65・94実測図（縮尺 1/20,1/40,1/80）

全体的に削られているが、南側の比高差は50cmである。柱穴の大きさは、40～80cmとほぼ揃っている。柱間が広く古墳時代竪穴住居址の柱穴の可能性は否定できない。形状は隅丸方形か円形である。出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、古墳時代～平安時代と考えられる。

4）土壙（SK）（Fig.5・8・12・14・18　PL.4・5・14・15）

土壙は8基検出した。そのうち4基を図示した。

SK-01（Fig.5・12　PL.14-2）　調査区の南西隅から検出した。周辺が赤く焼けており、検出時に伏焼土壙であることが、すぐに判明するほど壁面が焼けている。形状は隅丸台形状を呈し、底面から側面にかけて袋状を呈する。法量は長さ223×幅133×深さ30cmを測る。主軸の方向はN-142°-Wで、埋土は炭が多量に出土する。出土遺物はないため時期は確定できない。

SK-02（Fig.5・12　PL.15-1）　調査区の西隅から検出した。土壙内に拳大の円礫や角礫がびっしり詰まっている状態で検出した。石蓋土壙と思われる。形状は隅丸方形で、法量は長さ150×幅125×深さ56cmを測る。主軸の方向はN-2°-Wである。

SK-03（Fig.5・14　PL.4-1）　調査区の東隅から検出した。土壙内からFig.18-76～85に図示した遺物が出土している。形状は楕円形で、法量は長さ230×幅190×深さ50cmを測る。主軸の方向はN-45°-Eである。時期は出土遺物から古墳～奈良時代である。

SK-04（Fig.8　PL.4-2・5-1・15-2）　調査区の東隅から検出した。SC-01・03・04から切られる形で検出した。SC-04の付属施設（出入口部）とも考えられるが、一応土壙としておく。形状は正方形で、遺存状態は悪い。法量は長さ185×幅135×深さ15cmを測る。主軸の方向はN-12°-Eである。時期は切り合い関係から古墳時代である。

5）護岸状遺構（SG）（Fig.5・13　PL.4-2・13）

中央部より北の二段目と三段目の段落部分に長さ530×幅100×深さ40cmの規模で石組が施されていた。地山を階段状に削り、その上に石を並べているが、その配列は整然としている。出土遺物はないが、SB-10を切る形で造築していることから、古墳時代以降と考えられる。主軸の方向はN-45°-E。

6）溝状遺構（SD）（Fig.5・14　PL.4・5・10-2・12-2・14-1）

溝状遺構は14条検出した。そのうち2条を図示した。

SD-01　SB-05の北側に位置し、当初は雨落ち溝と考えたものである。全長7m、幅90から130cm、深さ20～30cmを測る。主軸の方向はN-111°-Eである。出土遺物から奈良～平安時代と考えられる。

SD-02　調査区南東隅に東西方向に、傾斜に沿って西が高く東が低い状況で検出した。全長11m、幅50～120cm、深さ12～45cmである。主軸の方向はN-58°-Wである。出土遺物から古墳時代である。

他の溝は時期不明のものが多いが、SD-02の北東側を流れているSD-07もSD-02と同様の時期。

このほかに数多くのPitが検出された。Pit-94は84×50cmの長方形の形状を呈するが、礎盤と考えられる石組みがある。残念ながらこの1個だけの検出であるため建物の柱穴との判断を下すことができなかったが、礎石の下部構造に類似している。また、Pit-65はSD-01の北側の位置し、SD-01に流れ込む形状を呈する。北側が高いため水の流れから考えてSD-01に付随するものと考えられるが、一応Pitとして登録した。

下部の遺構として、中央の試掘トレンチを排水のため利用し、この部分の掘削を行った際に、Pitおよび弥生土器の細片が検出された。しかし、九州大学との協議で下部の遺構に関しては調査を行わず全体を緑地保全地区の対象地として保存していくこととなったため、下部の弥生時代の遺構に関しては調査は行わないことにした。

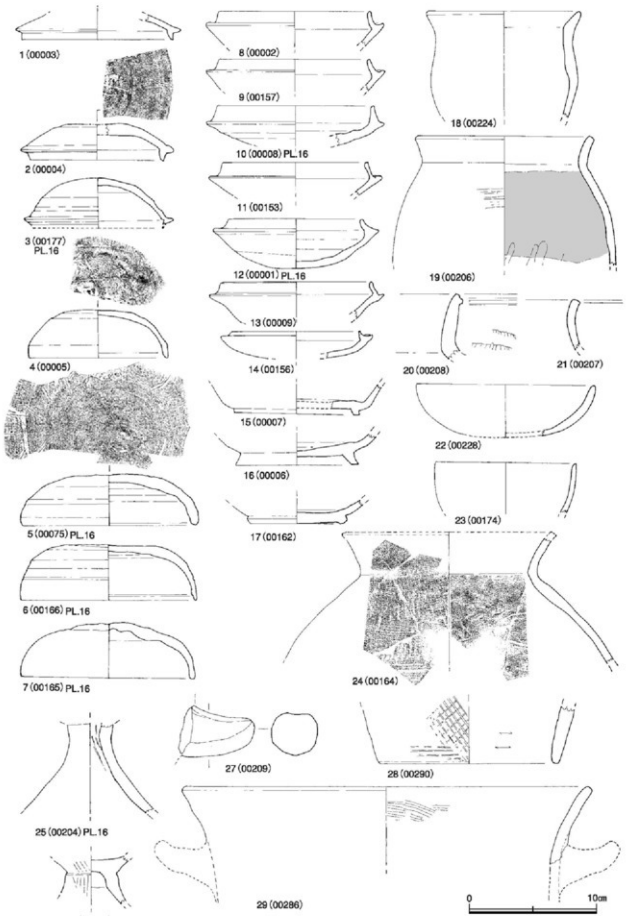


Fig.15　出土遺物－１（SC-01・03・04）実測図（縮尺1/3）

3．出土遺物

遺構内と包含層から土器・石器・陶磁器・鉄器・鉄滓等が出土した。縄文器時代の石鏃、石斧等が包含層から出土している。元岡・桑原遺跡群には数多くの後期旧石器から縄文時代の遺物が出土しているが、明らかな遺構として第３次調査地点だけ、他からは明確な遺構及び包含層の検出はない。26次調査でも遺構検出時からの出土である。これは対岸の桑原飛櫛貝塚の時期と符合する。弥生時代の土器・石器も出土している。しかしながら、弥生時代の遺構は26次調査の中央トレンチの下部(検出された古墳・奈良～平安時代の遺構から約0.5m～１m下から検出)から柱穴等が検出されているだけで密度は薄い。古墳時代、奈良時代に周辺部が開発されたために遺構が消滅した可能性が高い。この26次調査地点も急傾斜である点と現代において著しく削平されている。このため奈良から平安時代の遺構は東部分が削平されたと考えられ残りが悪い。遺構別に住居址から記載していく。

１）遺構出土の遺物（Fig.15～18　PL.16～17）

SC-01・03・04出土土器（Fig.15　1～13　PL.16）

SC-01・03・04は切り合い関係があり、出土遺物も接合するものが多い(３・11・13・20・21・24・27・28)。SC-01以外は床面からの出土遺物を主に図示した。

SC-01から出土した土器は、須恵器が１・２・４・８・９・12・14～17の10点、土師器が19・25・26の３点を図示した。１・２・４は杯蓋である。１・２は身と蓋が反転し、天井部につまみを持つ前段階の蓋で、受部の立ち上がりが鈍角である。１は最大径13cm、復元口径12cm、残存高２cm、受部立ち上がり0.8cmである。内外面とも青味かかった灰褐色を呈する。２は最大径12.2cm、復元口径10.6cm、残存高2.8cm、受部立ち上がり0.8cmである。内外面とも淡灰褐色を呈する。天井部に三条の沈線による篦記号を配する。１・２とも外面篦削りはなく、回転ナデ仕上げである。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良好。４は受部を持たない１・２より古い杯蓋である。外面ナデと回転ナデを施し、内面は回転ナデと指押さえを施している。外面天井部に「×」の篦記号を記する。復元口径11.2cm、器高3.8cm、内外面とも灰褐色を呈する。胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良好。８・９・12・15～17は須恵器の坏身である。15～17は高台を有する。８・９は須恵器の坏身で、最大径14cm・口径12cm、受部高は1cmと同じである。立上りは8・9とも一度中に入り端部で外反する。色調・胎土・焼成は同じで２mm前後の砂粒を含む精製された粘土を使用している。色調は内外面とも暗灰褐色を呈し、焼成は良好である。12は最大径13.2cm、器高口径10.5cm、受部高0.8cmと８・９より小振りである。胎土・色調・焼成は8・9とほぼ同じである。14は坏蓋である。受部高が低く受部が広い形態を呈する。最大径12cm・口径10.2cm、受部高は0.3cmである。

15～17は高台付きの碗である。遺構上部から出土したため住居址の時期ではなく掘立柱建物の時期と考えられる。３点とも口縁部が破損している。底部の高台に違いがある。15は垂直に取り付けられ高台高も0.3cmと浅い。16は高台高が高く、外に開く形状を呈する。17は高台高がほとんど無く端部を削り取り磁器の底部形状に類似する。底径は15が9.8cm、高台高0.3cm、16が9.6cm、高台高1cm、17が7.8cm、高台高0.1cmである。

土師器は19・25・26がSC-01から出土した。

19は竈南西部の灰原から出土した甕形土器で、床面近くの出土である。最大径は胴部中位にあり、胴部の張りは少ない。やや内湾しながら頸部に達するが、頸部から外反しながらほぼ垂直に立ち上がり口縁端部を丸く収める。口径14cm、残存高10cmである。胎土は1mm前後の長石、石英の砂粒を多く含み、色調は外観が黄味をおびた赤褐色、内面が暗褐色を呈する。25・26は高坏の脚部である。表面全体が摩滅を著しく受けており、住居址に伴うものとは考えにくい。胎土は胎土は2mm前後の砂粒を多く含み、色調は内外面とも赤褐色を呈する。

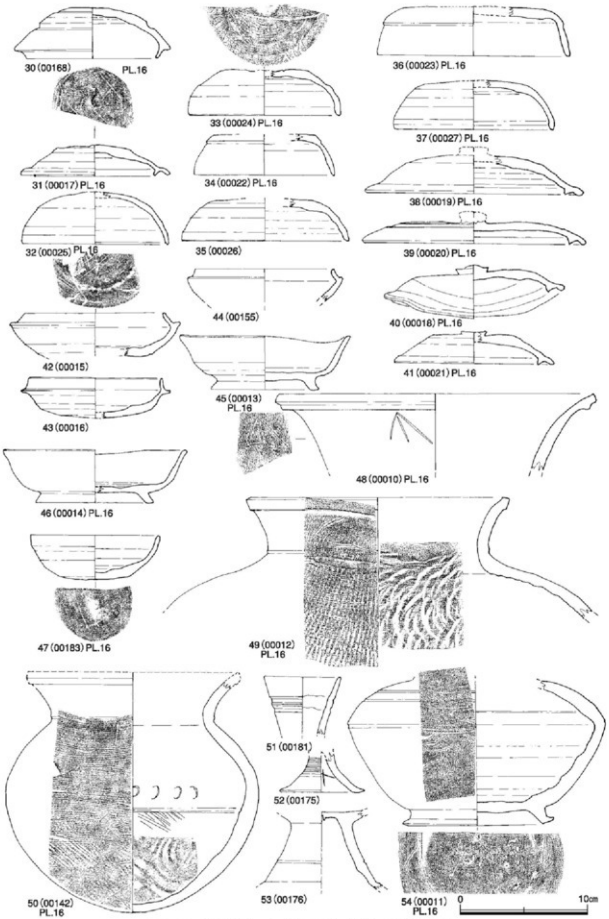


Fig.16 出土遺物－2 (SC-02) 実測図 (縮尺1/3)

SC-01・03・04接合の土器（Fig.15-3・10・11・13・20・21・24・27・28　PL.16）

3・10・11・13はSC-01・03・04から出土した須恵器坏身の破片が接合したものである。どの住居址から出土したか不明である。**3**は坏蓋で受部の形状が碗状になることから坏蓋とした。受部口縁が破損している。最大径11.8cm、受部径10.2cm、器高4.0cm。**10**は坏身で、口径12.2cm、残存高3.1cm、受部径が14.0cm、受部高が1.4cmを測る。口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。**11**は坏身で、口径11.2cm、残存高2.6cm、受部径が13.6cm、受部高が1.1cmである。**13**は坏身で、口径11.8cm、残存高2.8cm、受部径が13.7cm、受部高が1cmを測る。4点とも色調は青灰褐色を呈し、焼成は良好である。**24**は口径15cmの小型の甕形土器である。口縁部に篦記号がある。胴部中位に最大径があり、頸部まで内向し、頸部で大きく外反し「く」の字状を呈する。内外面とも縦・横のタタキを施している。頸部から口縁にかけてはナデ仕上げを施し、頸部の一部に「八」の篦記号がある。胎土は0.5mm大の砂粒を含み一部に黒色粒・雲母粒を含んでいる。色調は灰色を帯びた褐色で、焼きが甘く生焼け状態である。口径16.7cm、頸部径13.8cmである。

土師器は**20・21・27・28**の4点を図示した。**20**は壷形土器の口縁部である。頸部から胴部にかけて大きく膨らむ形状を呈する。頸部からやや外反しながら垂直に立ち上がる。口縁部外縁に「コ」字状の突帯を巡らす。**21**も壷形土器の口縁部片で、頸部からやや外反しながら垂直に立ち上がる。**27**は甑の把手である。**28**は甑の底部片で、底面のない形態の甑である。外面に格子タタキが僅かに残っている。内面は篦削りを施している。底径14cmを測る。

SC-03出土土器（Fig.15-29）

29は甑の口縁部片である。口縁部か外反しながら大きく外へ開き、端部は丸く収める。刷毛目の後ナデ仕上げを行っている。口径は32.2cmで、胎土は1～2mm大の石英・長石を多く含み一部に雲母粒を含んでいる。色調は内外面とも明赤褐色を呈し、焼成は良好である。

SC-04出土土器（Fig.15-5～7・18・22・23　PL.16）

5～7は坏蓋である。**5**は床面とP-38・P-40と包含層の出土土器が接合した物である。天井部に「×」の篦記号がある。口径14cm、器高4cmを測る。全面が回転ナデ仕上げで轆轤回転は時計回りである。**6**は口径14cmと同じであるが、器高が僅かに高く4.4cmある。外面の篦削りが中央部から天井部までであり、轆轤回転は時計回りである。**7**は口径13.7cmと前の二点より僅かに小さい。口縁部の一部が欠損するがほぼ完形である。SC-04の竈内から出土した。器高は4.3cmで、色調は三点とも内外面とも青灰色＋黒灰色を呈するが、**7**だけ一部自然釉による釉だまりが見られる。**23**は床面から出土した須恵器で、深い碗形を呈する土器である。口径11cmで、内外面とも水引きによる成形を施し、いわゆる「赤焼土器」と称している物である。色調は暗赤褐色を呈する。胎土は精製された粘土を使用している。

18・22は土師器である。**18**は床面から出土した土師器の甕形土器片である。最大径は口縁部にあり胴部は張らない。胴部からほぼ垂直に立ち上がり、頸部で大きく外反し、口縁端を丸く収める。**22**は床面検出土器である。やや浅い形状を呈する土師器の碗形土器である。口径14cm、器高4.2cmを測る。器面は水引による成形を施す。

SC-02・05出土土器（Fig.16-30～18-75　PL.16・17）

SC-02・05の出土土器は、当初SC-02の住居址だけの痕跡しか検出できず、壁溝によって住居址が切り合っていることが判明した。それまで、すべてSC-02で遺物を取り上げていたため、SC-05の出土土器の点数は少ない。本来区別しなければならないのであるが、当方のミスで遺物はSC-02として登録して図化した。壁溝の切り合い関係からSC-02がSC-05を切る形で検出されたことから、土器にも変化があると考えられるが、その区別が明確でないため今回はSC-02検出土器として取り上げておく。

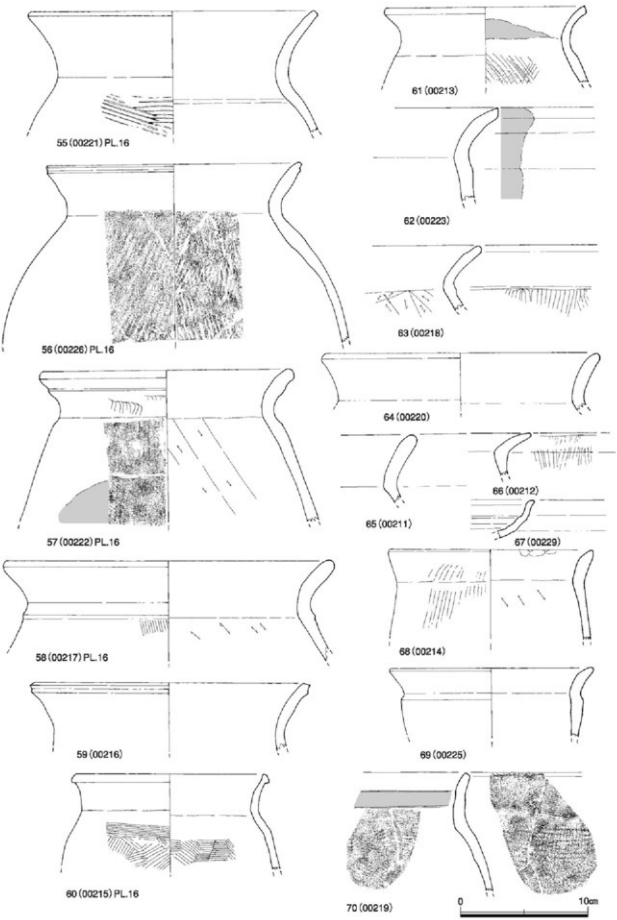


Fig.17　出土遺物－３（SC-02）実測図（縮尺 1/3）

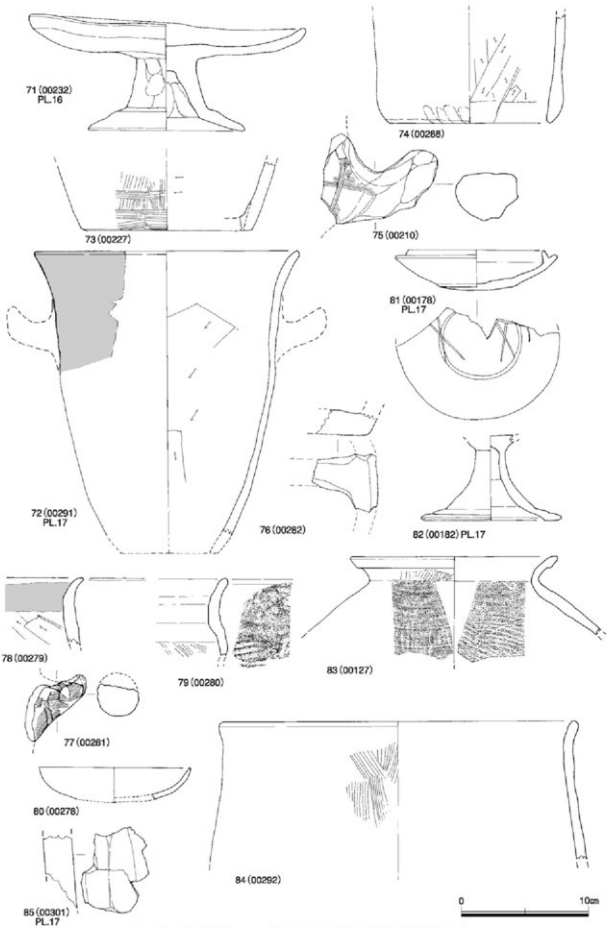


Fig.18　出土遺物－4（SC-02,SK-03）実測図（縮尺 1/3）

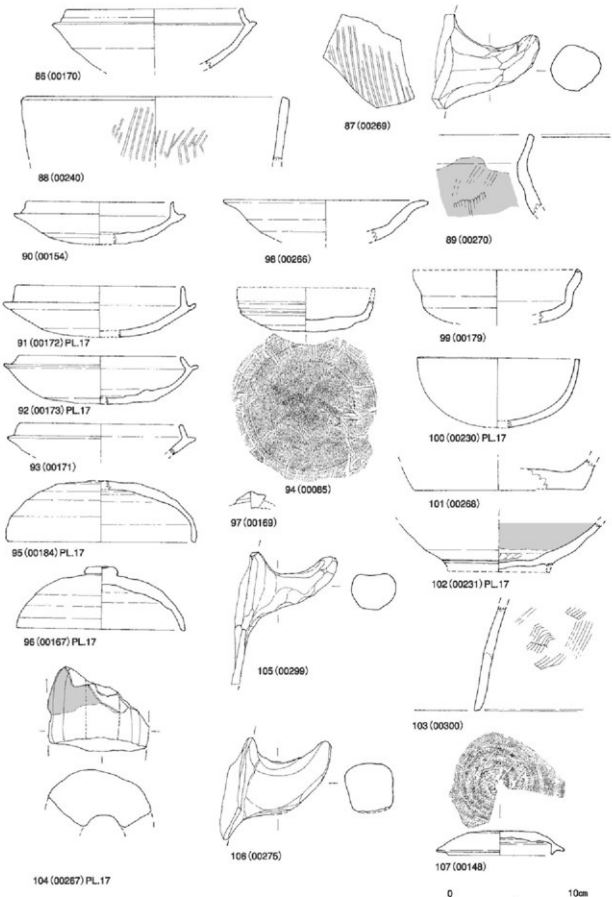


Fig.19　出土遺物－5（Pit出土）実測図（縮尺 1/3）

杯蓋は30～41の12点を図示した。紙面の都合上遺物の特徴を記す。出土した坏蓋は時期差があるが、壁溝内出土の土器は32・33・37で、他は上部から出土している。30・31は篦削りが中間部あたりまで行われ、内側に受部を有するタイプ１。32・33・35・37は内面受部が無いタイプ２。34・36は天井部が平坦となり、カキ目及び篦削りを行っているタイプ３。38～41はつまみを持つタイプ４である。篦記号を有するものは、31・33である。口径はタイプ１が11.6cmと12.4cm、タイプ２が11.6～13.2cm、タイプ３が11cmと15cm、タイプ４が12.4～17.4cmである。**坏身**は42～47の６点を図示した。これも3種に区別できる。42～44は受部を有するタイプ、47の受部が無く碗形状になるタイプ、45・46は底部が高台付きとなり、口縁部に受部を持たないタイプである。47は赤焼土器である。

48～50は須恵器の甕・壷形土器を図示した。48は口径24.6cmで、口縁部しか残っていない。口唇部に三角突帯を貼り付けている。頸部に「人」の篦記号を有する。49は胴部以下が欠損する。形状は最大径が胴部中位にあると思われ、そこから内湾し、頸部で大きく外反しながら立ち上がり、口縁部に達する。外面口唇部に三角の突帯を巡らす。外面胴部は平行タタキで、一部に横方向のナデを施している。頸部から口縁部は縦方向に平行タタキの後ナデ、内面は胴部以下が同心円紋のタタキを施している。口径20.6cmである。50は小型の壷形土器で、口縁部の一部を欠損する。最大径は胴部中位にあり21cmを測る。胴部から内湾しながら頸部に達し、頸部から大きく外反して「く」の字状を呈し、口縁部に達する。口縁部は三角突帯を口唇部に巻付け丁寧に成形している。器面成形は口縁部がナデ、外面胴部がカキ目、胴部下位が平行タタキのあとカキ目を施す。内面は底部付近で同心円紋のタタキを施し、全体的に篦ナデ、回転ナデを施している。口径は16.7cm、器高19cmを測る。51は堤瓶の口縁部で、口径６cm。52は高坏の脚部で、底径6.7cm、外面に自然釉が掛かっている。53も高坏の脚部である。54は高台付き直口壷で、口縁部が欠損している。胴部が最大径20.1cmであるが、そこを起点として大きく内湾して頸部に至るもので、外面に四条の沈線を巡らせている。第一と第二の沈線間に波状紋を施す。底部は高台を貼り付け、端部を外に折り曲げ成形している。底面に「八」の篦記号を記す。底径11.6cmを測る。

土師器（Fig.17-55～18-75 PL.16・17）　甕形土器・壷形土器の口縁部を図示した。紙面の都合上、口縁の形状で説明していく。口縁部の形状は大きく分けて三タイプに分けられる。**タイプ１　頸部が締まり、大きく外反しながら立ち上がる、いわゆる「くの字」状口縁と呼ばれるタイプで、55～58、60・61・63～65の９点を図示した。タイプ２　頸部から直立し、口縁端部が大きく外反し、形状が「Cの字」状を呈する口縁部で、66の１点。タイプ３　胴部が張らず口縁部に最大径があり、頸部から僅かに外反しながら口縁部に達し、口唇端部が大きく外反する、59・62・67・68の４点を図示した。タイプ４　胴部から内湾しながら頸部に達し、頸部からほぼ垂直に立ち上がり口唇端部で僅かに外反する69がある。**特徴的なものとして、口縁部・頸部に三角突帯58・59、沈線56、口唇部をつまみ出すもの60がある。成形は殆どがタタキ、ナデ仕上げを施している。口径は55が22.8cm、56が20.2cm、57が20cm、58が26cm、59が21cm、60が15.6cm、61が15.8cm、64が21.8cm、67が16cm、68が16cmである。70は碗である。71は高坏で、杯部径が21.9cmと大きい。器高が9.2cm、底径が12.4cmを測る。72～75は甑である。72は把手と底面を欠損する甑で、口径28cm、器高推定32cm（残存高30cm）で、内面篦削り、外面ナデ仕上げである。73・74は甑の底部で、26次調査で出土する甑の底部は中央に一条の帯を残したタイプが多い。73の底径は13.4cm、74は12.4cmを測る。75は甑の把手である。把手もいくつかの形態がある。

SK-03出土土器（Fig.18-76～84 19-106・107　PL.17）

SK-03出土の土器76～84、106・107の11点図示した。**76・77**は甑の把手と底部である。**78・79**は土師器の甕形である。**80**は土師器の碗で、**81～83**が須恵器である。**81**は赤焼土器の坏身で、口径12.6cm、

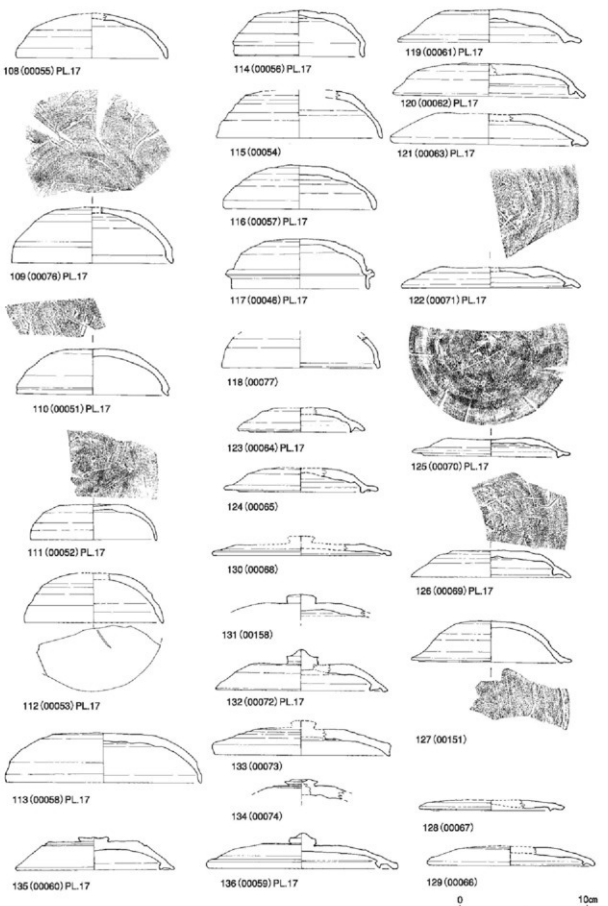


Fig.20　出土遺物－6（包含層出土－1）実測図（縮尺 1/3）

器高3.2cmである。底面に「××」の篦記号がある。82は高坏の脚部で、底径11cmを測る。83は口径16.2cmの甕形土器である。内外面とも平行タタキを施し、ナデ仕上げである。84は甑の口縁部で口径28.5cmを測り、外面は刷毛目調整、内面は篦削りを施す。85は支脚片である。106は甑の把手、107は須恵器の坏蓋で受部をもつタイプで、天井部に「|||」の篦記号を有する。

掘立柱建物及びPit内出土土器（Fig.19-86～105　PL.17）

掘立柱建物の柱穴から出土した土器とPit内から出土した土器を図示した。SB-02から86、SB-05から87・89、SB-09から88・90、SB-11から98、SC-02の柱穴から92・93が出土した。この他にPit-48から94・97・99・102、Pit-54から103・105、Pit-30から104、Pit-09から96、Pit-68から95、Pit-27から91が出土した。柱穴の覆土から出土したものか、柱痕内から出土したものかは重要な判断基準となるが、殆どが覆土内からの出土である。このことから遺物が上限の時期を示すとしても建物自体の時期を示す物ではない。特記すべき遺物は、99が赤焼土器、104が鞴の羽口片である。86・90～97・99が須恵器、他は土師器。

3）包含層出土の遺物（Fig.20～27　PL.17～20）

包含層から多数の土器が出土した。その内の数点であるが、Fig.20～27に図示した。

須恵器

坏蓋（Fig.20-108～136）　紙面の都合上、詳細には説明できないためタイプ別に分け特徴を明記する。　**タイプ1**　外面篦削りが中央付近まで認められ、口縁部は丸みを持っている108・111・112・115がある。　**タイプ2**　篦削りは1/3程度である。口縁内部に段を有する109・118がある。**タイプ3**　口縁部が薄く端部が外へ外反する110・113・114がある。　**タイプ4**　117の1点だけであるが、坏身が反転した形状で、受部が垂れ下がる形状を呈する。　**タイプ5**　坏身の形状が反転した形状で、受部張出しが内面に納まっている120・122・126がある。　**タイプ6**　形状はタイプ5に類似するが、内面の受部張出しが外へ張出している123・124・119～121・125・127～129がある。7～9はつまみの形状で区分した。　**タイプ7**　135に見られるように高さが低く幅があり、丁寧な造りである。130も同じかもしれない。　**タイプ8**　つまみに高さがあり、中央部の凸部が見られる132・134・136がある。　**タイプ9**　つまみの形状が丸みを帯び雑な造りの131・133がある。

坏身（Fig.21-137～22-174）　坏身もタイプ別に分ける。口縁部のみの分類で、大別して6タイプである。　**タイプ1**　受部が一度中に入り、口縁部が反り気味に外反しながら立ち上がる137・139・144・146～149がある。　**タイプ2**　受部が平坦で、口縁部が直線的に立ち上がる145・150がある。　**タイプ3**　受部が深く、口縁の立ち上がりは緩やかで内に入る形状の138・140・142・143・152～154・157がある。　**タイプ4**　受部の稜が無く、すぐに立ち上がる141・151・155・156・159がある。**タイプ5**　受部が無くなり口縁部が内湾しながら立ち上がる160・166・171～173がある。　**タイプ6**　口縁部が外に広がる形状を呈する161・165・168・170・174がある。

壷形土器（Fig.22-175～179）175・176・178は小型の短頸壷である。胴部中位から頸部にかけてカキ目を施す178や胴部上位に一条の沈線を巡らせたもの175がある。177・179は長頸壷の胴部片である。177はカキ目のほか二条の沈線を配する。179は胴部上位に二条の沈線を配しその間に格子紋を配する。

高坏・台付壷（Fig.22-180～191）高坏の坏部5点と脚部7点を図示した。180は大型で深い碗形の形状を呈する。口縁部がほぼ直立し、端部がわずかに外反する。181は下部にカキ目を施し、緩やかに内湾しながら立ち上がる。182は下部にカキ目、中央部に三条の沈線を巡らし、外反しながらほぼ垂直に立ち上がる。183・184は底面が平坦面を有し、そこから大きく外反しながら立ち上がる。脚部も色々な形状が見られる。裾が広がったままの185・186・189、透かしが入る190、外側に段を有する187・188がある。191は台付壷の脚部と考えられる。外面に段を有し、造りも丁寧である。脚径21cmを

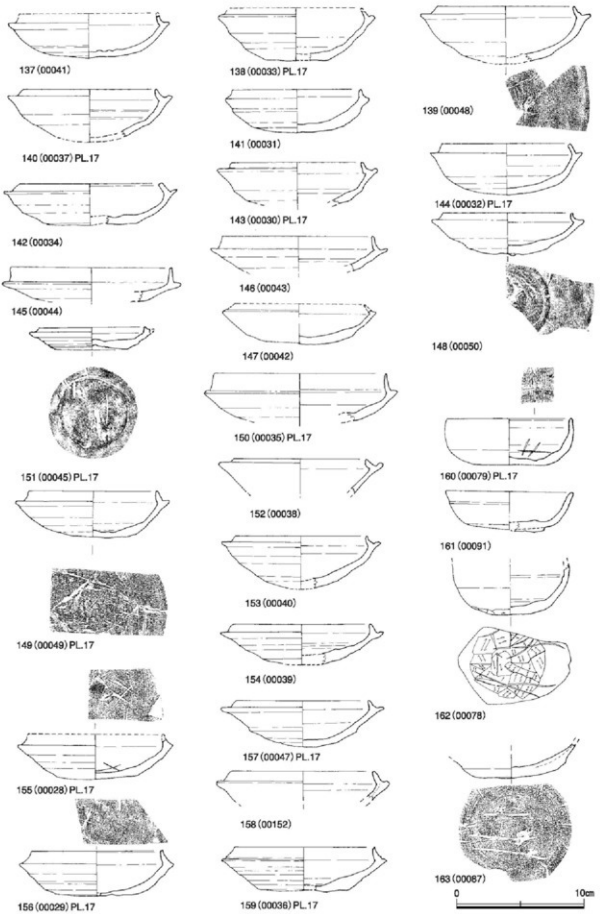


Fig.21　出土遺物－7（包含層出土－2）実測図（縮尺 1/3）

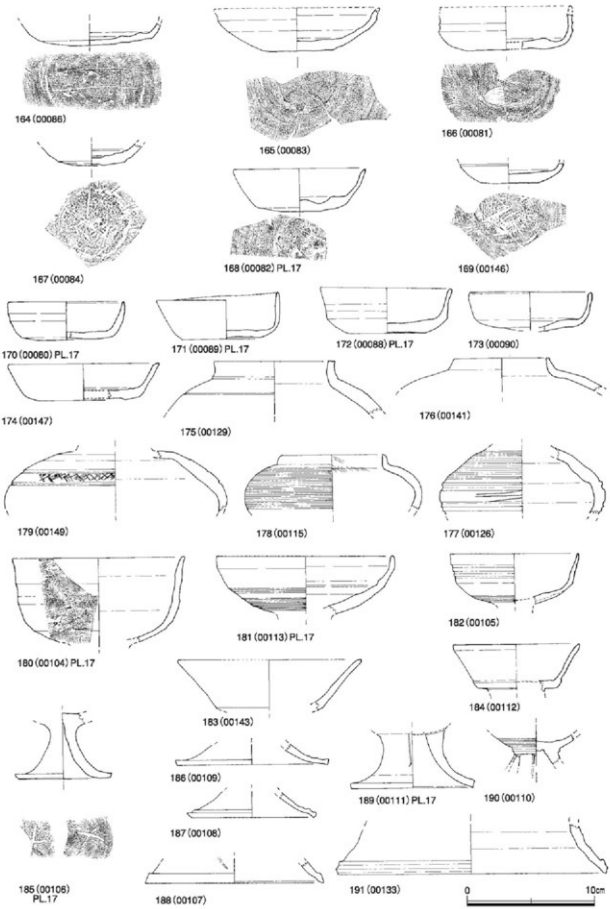


Fig.22　出土遺物－8（包含層出土－3）実測図（縮尺 1/3）

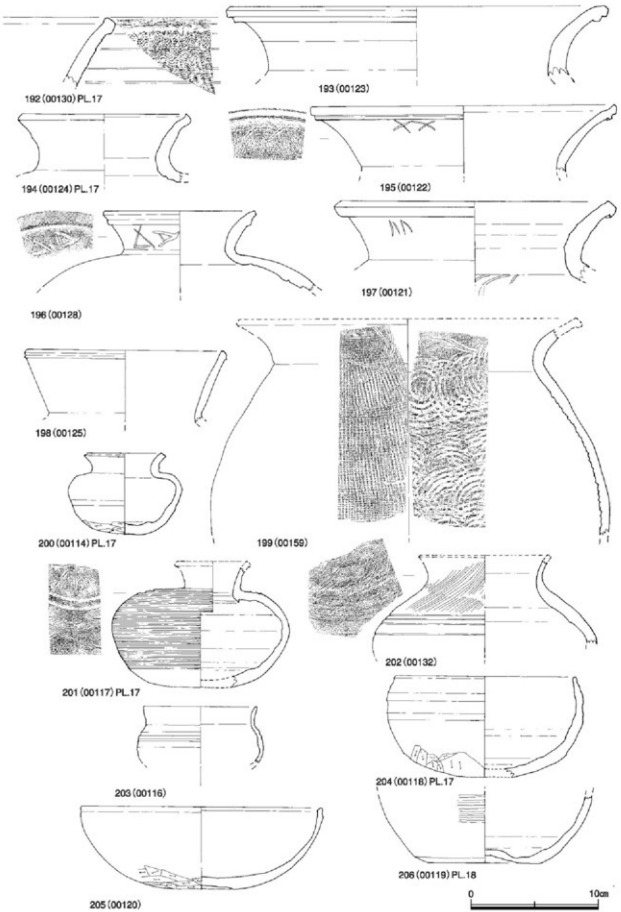


Fig.23　出土遺物－9（包含層出土－4）実測図（縮尺 1/3）

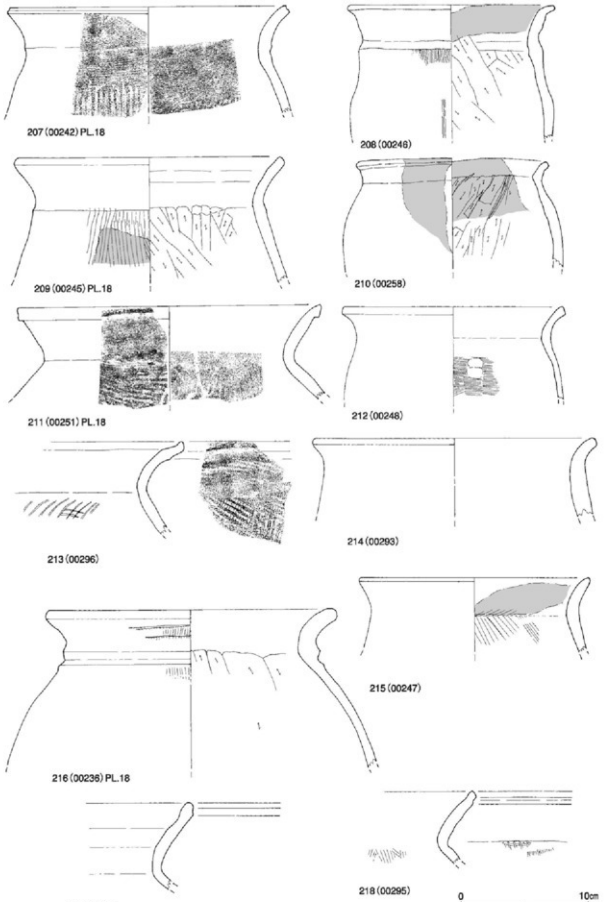


Fig.24　出土遺物－10（包含層出土－５）実測図（縮尺 1/3）

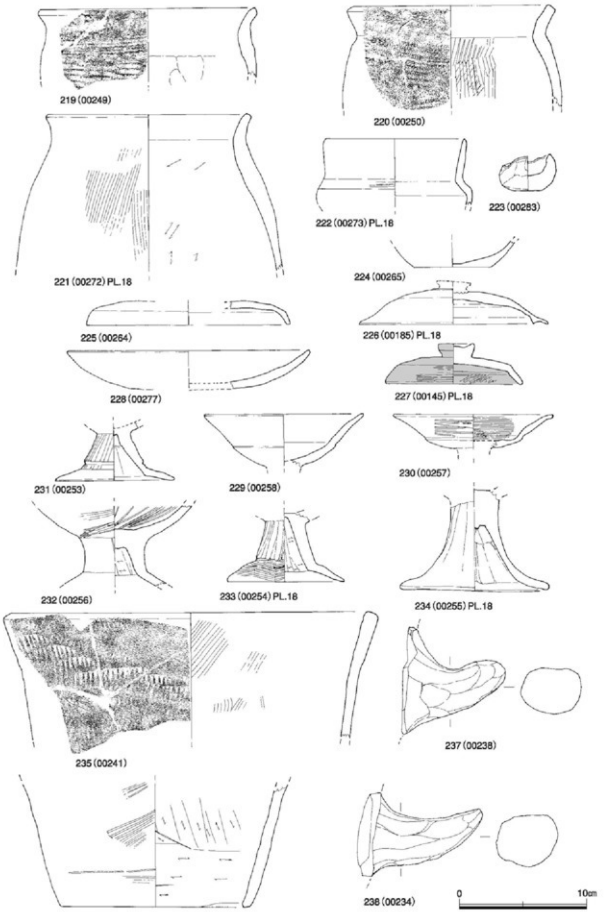


Fig.25　出土遺物－11（包含層出土－６）実測図（縮尺 1/3）

測る。

甕形土器・壷形土器・碗（Fig.23-192～206）

大型甕形土器の破片はなく、小型・中型の甕形土器・壷形土器の破片が出土している。篦記号は195「××」、196「△ア」、197「/\/\」を持つ口縁部がある。また、口縁部に波状文や口唇部に突帯を配するものがある。194のように口唇部が嘴状を呈するものがある。口縁部形態は「く」の字、「C」の字、直口タイプがある。外面は口縁部がナデ、胴部が平行タタキとカキ目の組み合わせのもの、内面は同心円文のタタキの199もある。小型の壷形土器200は底面が篦削りを施している。201は外面に二条の沈線を配し、カキ目を施す堤瓶である。202は胴部中位に四条の沈線を配し、頸部から口縁部にかけて刷毛目を施す壷形土器。204・205は底部が丸底に近い平底で篦削りを残す碗形土器。

土師器・坏蓋・高坏・甑・碗・合子・青磁碗・高台付碗等（Fig.24-207～27-283）

土師器の甕形土器はSC-02の土器説明で示した口縁形態で分類したものに準ずる。　**タイプ1　頸部が締まり、大きく外反しながら立ち上がる、いわゆる「くの字」状口縁と呼ばれるタイプで、**207・209～211・217・218がある。外面調整はタタキが主で、内面は篦削り及び口縁部はナデ仕上げである。口唇部に突帯を貼り付けているもの211や口唇部が内に入る217があるが、最大径は胴部にあるのが特徴である。

タイプ2　頸部から直立し、口縁端部が大きく外反し、形状が「Cの字」状を呈する口縁部で、213・216の2点である。213は頸部が締まり口縁部に向かって大きく外反し、さらに口唇部で外へ開くが、端部は内側に入る形状を呈する。口径25cm前後と推定する。外面調整はタタキの後ナデ仕上げ、内面は篦削りを施す。216は頸部に一条の突帯を巡らし（貼り付け突帯ではなく摘み出しによる突帯）頸部は直立するが、口唇部にかけて大きく外反する。口径23cmで、外面調整は刷毛目に後ナデ仕上げ、内面は胴部が篦削り、口縁部がナデ仕上げである。最大径は胴部にある。　**タイプ3　胴部が張らず口縁部に最大径があり、頸部から僅かに外反しながら口縁部に達し、口唇端部が大きく外反する、**208・212・214・215・219・220の6点を図示した。208は胴部から頸部にかけ直立し、口縁部はわずかに外反し口唇部で大きく折れ曲がる。212は胴部が張らず直立し、頸部で内に入る。頸部から大きく外反する。214は口縁部のみが外反する。215は「く」の字口縁部に近いが、胴部が張らず丸く収まる。219も同じである。220も「く」の字状であるが、口唇部がさらに外反する。最大径が16～18cm程度である。　**タイプ4　胴部から内湾しながら頸部に達し、頸部からほぼ垂直に立ち上がり口唇端部で僅かに外反する221がある。**最大径が胴部にあり、やや内湾しながらほぼ直立した形状で頸部に達し、頸部から口縁部にかけて僅かに外反する。

222は小型丸底壷の口縁部、223は手捏土器、224は底部が平底の甕形土器片、225～227は坏蓋で、227は内外面とも黒色を呈する。形状的には須恵器であるが、須恵器の生焼けとは異なる。形態も独特で従来の須恵器、土師器とは違う。陶質土器かもしれない。228は盤で、口径19.2cmある。

高坏は坏部229・230と脚部231～234を図示した。内面に暗文を施した230・232や脚部外面に篦削り後、磨きを施した233がある。231の脚径は9.4cm、233は9cm、234は11.6cmである。229の杯径は12.4cm、230は12.4cmを測る。

甑は口縁部235・239・240と底部236・241～244、把手は237・238・245～251を図示した。甑の底部は242に見られるごとく第27次調査、26次調査でも出土した底部は同様の形態を示す。甑の把手も2つのタイプがある。ほぼ直線上を呈する237・238・240・246～249と端部が大きく上に跳ね上がるもの239・245・250・251がある。235は口径29.6cm、外面調整は平行タタキ、内面は刷毛目調整である。この形状からすると把手がつかない可能性が高い。239は口径28cmで、把手が付くタイプである。把手は手は直線的で端部が僅かに上がるタイプである。外面調整は荒い刷毛目、内面は篦削りを施している。上部に跳ね上がる。外面調整は刷毛目、内面は篦削りを施す。240は口径が19.6cmと小型である。

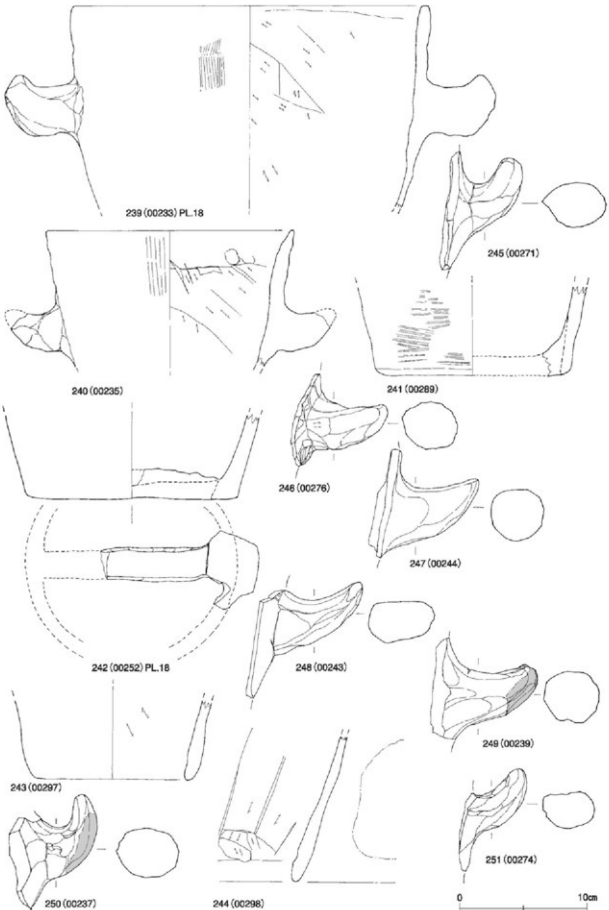


Fig.26　出土遺物－12（包含層出土－７）実測図（縮尺 1/3）

241は底径15cmの底部片で、242に見られる中央部に一条の櫛状のつなぎのある痕跡を残している。外面調整は平行タタキで、内面は指押さえを施す。242は底部片である。外面調整は篦削り、内面は指押さえである。底面に赤色顔料が付着している。底径は16.4cmである。この甕の底部形態が出土したことで、今まで不明であった破片が、甕であることが判明した。また、底部236や243・244なども甕の底部片である。

252は壺の口縁部で、口径10cmを測る。口縁下に波状文を配する。253・254は提瓶の口縁部である。253の口径は5.2cm、254は5.4cmである。255は提瓶の把手である。256は短頸壷の口縁部片で、口径5.6cmである。257・258は直口壷の口縁部である。257の口径が10cm、258も10cmである。頸部中位に二条の沈線を配する。259は小型壷形土器の底部である。260は口径14.1cm、器高5cmの土師器碗である。底部は平底に近い丸底で、その部位は篦削りである。底部から胴部中位までは厚みのある断面であるが、胴部中位から口縁部にかけて薄く仕上げている。その部分に段が生じている。外面調整は胴部から口縁部にかけて篦磨きを施す。内面は横位の篦磨きの後、縦に暗文を配する。色調は内外面とも赤褐色を呈する。261～264は高台付碗である。261は表面が剥落しているため調整方法は不明である。底径は10cm、高台高は1.7cmである。底部から立ち上がる部位に高台を貼り付けている。262は内外面とも篦磨きを施している。外面色調は明赤褐色、内面は黒色でいわゆる内黒土器と呼ばれているものである。底径は8.4cm、高台高は1.5cmである。高台は立ち上がり部位に近いところに貼り付け端部は鋭利な造りである。263も内黒土器である。色調は外面が黄褐色、内面が黒色を呈するが、内外面とも表面が剥落しているため調整方法は不明である。底径は9.4cm程度、高台は欠損。底部の立ち上がり部位に高台を貼り付けている。264も小型の内黒土器である。内面は篦磨きを施し、色調は内面が黒色、外面が明黄褐色を呈する。底径は6.6cm、高台高は0.7cmである。高台は立ち上がりよりやや上に貼り付けている。265は青磁の合子肩部片である。やや暗青緑色を呈している。266は越州系青磁碗の口縁部である。口径19.8cmで、色調は内外面とも暗黄色を呈する。267は瓦質に近い堅緻な焼きの擂り鉢状土器である。外面調整は回転ナデにより凹凸をつけ、内面も回転させた篦工具により凹凸を造りだしている。底径15cmである。色調は内外面とも明赤褐色を呈する。釉をかけたものと思われる。268は須恵器の盤である。底径11cmである。

269～283は須恵器の高台付碗を図示した。高台の形状で分類できる。**タイプ1**　底部から胴部に立ち上がる部位より内側に高台を貼り付ける。貼り付けた部分を押さえるため凹みが生じ段を持つ。そのためか高台端部は外へ張り出した形状を呈する269～273・279・280・283がある。　**タイプ2**　底部から胴部に立ち上がる部位に高台を貼り付ける。貼り付けた部分の押えが緩やかであることで、高台端部が緩やかな弧を描く274～278・281・282がある。タイプ1の高台径と底径を見てみると、269は高台径7.5cm、底径8.4cm、270は高台径8cm、底径9cm、271は高台径8.1cm、底径9cm、272は高台径10.2cm、底径10.2cm、273は高台径9.3cm、底径10.3cm、279は高台径9cm、底径12.2cm、280は高台径7.3cm、底径9.4cm、283は高台径9.7cm、底径11cmと272を除くと高台高と底径の数値に相当な開きがある。これに対してタイプ2は底部と胴部の立ち上がりに高台を貼り付けることから差異はない。

住居址・包含層出土の土器を記述してきたが、紙面の都合上詳細に述べることができなかった。ただ、これらの土器は大まかに二時代に区別できる。古墳時代と奈良・平安時代である。住居址内から出土した土器でも覆土上部から出土したものは奈良～平安時代遺物である。掘立柱建物や石蓋土壙など明確な時期を確定することはできないが、多量な奈良～平安時代の遺物から考えて26次調査地点に居住していたことを物語る遺物であることは間違いない。遺跡は保存されることが決定したことで、再検証できる遺跡である。

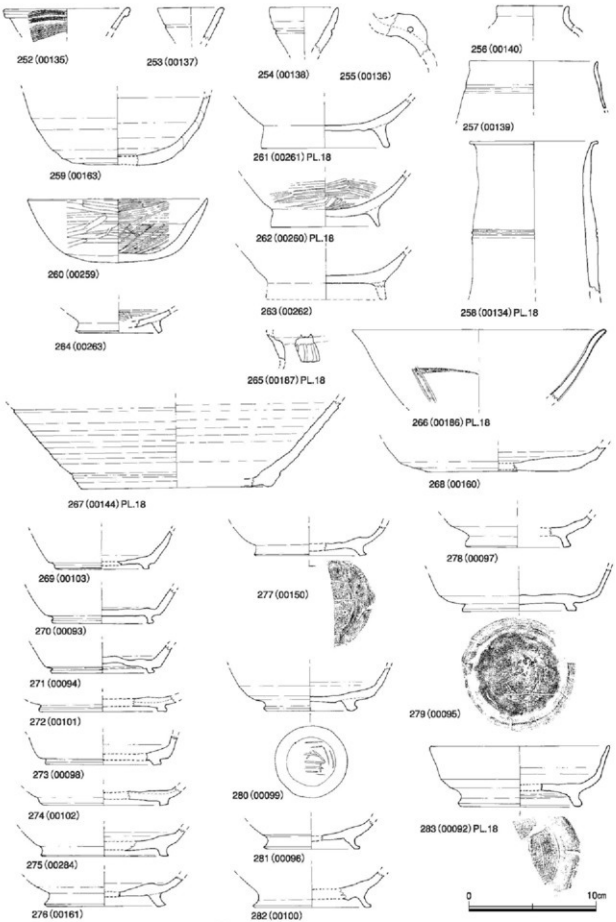


Fig.27　出土遺物－13（包含層出土－8）実測図（縮尺 1/3）

3）鉄器・石器・土錘・鉄滓・篦記号のある土器

鉄器 (Fig.29-289　PL.20)

鉄器は1点出土した。**289**はG-13茶褐色包含層より出土の円盤状鉄製品で、中央に円形の小孔を有する。直径43mm、高さ5mm、孔径3mmで、僅かながらドーム状に湾曲する。それに伴い孔の部分も片面に突出し、突き出た部分は折り曲げて土手状に孔を巡っている。板の厚さは腐蝕のため正確に捉えることはできないが概ね1mm程度と考えられ、縁に行くにしたがって薄くなるようである。その形状から紡錘車の整部と考えられる。（比佐陽一郎）

石器 (Fig.28-1～18　PL.18・19)

石器はⅠ区とⅡ区から出土している。1はⅠ区から出土した石器で、剥片と石核が接合する黒曜石の資料である。一方向からの剥離により剥取している。打面は調整打面で、裏面は自然面を有する。**2**はⅡ区の包含層から出土したサヌカイト製の三角族である。裏面にまだ第1次剥離面を残すが、他は丁寧に仕上げている。**3**はPit-48から出土した黒曜石製の剥片である。**4**はⅠ区包含層から出土した黒曜石製の打面再生剥片である。**5**はⅠ区包含層から出土した滑石製の紡錘車未製品で、周縁部に「V」字を連続した文様を配する。**6**は半裁された滑石製紡錘車である。Ⅱ区包含層から出土した。**7**は蛇紋岩製の小型磨製石斧である。Ⅱ区包含層から出土した。縄文時代に見られるタイプである。全長12.5cm、幅5.6cm、厚さ1.8cmで全面に研磨を施している。**8**はⅠ区包含層から出土した玄武岩製太形蛤刃磨製石斧片で、刃部を欠損する。風化が著しい。**9・10・13～17**は磨石兼叩石及び凹石である。9で代表されるように全面的に研磨され、上下端は叩石としての用途がある。中央部が凹む形状が認められる。石材は9・14・16が玄武岩、10・13が花崗岩、15が凝灰岩、17が滑石である。出土地区はすべてⅡ区包含層から出土した。**11**はⅠ区包含層から出土した砂岩製の石錘である。**12**は滑石製紡錘車の未製品でⅡ区包含層出土。18は砂岩製の砥石でⅡ区包含層出土である。

土錘・輪の羽口他 (Fig.29-284～288　PL.19・20)

284・285は輪の羽口を図示した。284はPit-60から出土。285はⅡ区包含層から出土した。両方とも表面が黒く焼けた状態で、内面は赤く焼けた状態である。

288は土錘である。Ⅱ区包含層から出土した。下部が欠損しているが、上部は一部破損するもののほぼ生きている。残存長5.3cm、外径が1.7cm、内径が0.7cmである。

286・287はPit-09から出土した炉壁を図示した。表面がかなりの高温で焼かれた状態で、表面に不純物が多く付着している。

鉄滓 (Tab-1　PL.19・20)

鉄滓はTab-1に示した通り220点出土した。この内、磁石により鉄分を保有している物は79点である。包含層からの出土の他、SC-01～04、Pit-07～09・14・31・37・42・48～50・60・68から出土している。鉄分を保有しているものはSC-01～04、Pit-07～09・14・31・48・60・68である。2004と2005はⅠ区包含層からの出土である。鉄分保有の鉄滓は図版内にFuの文字を挿入した。今回は写真報告のみにした。

篦記号のある土器 (Fig.29-290～305　PL.20)

篦記号のある土器は53点出土した。Fig.29に図示した物は、図化できないもの16点の拓影を示した。篦記号は約五種に分類できる。横「－」のもの、「二」の形状に似たもの、「三」の形状に似たもの「×」のもの、「横線と縦線を組み合わせた物」、「人」のものに大別できる。これは、元岡・桑原遺跡群第27次調査の須恵器群にも同じ傾向が認められ、同一窯で焼かれたものと考えてよい。

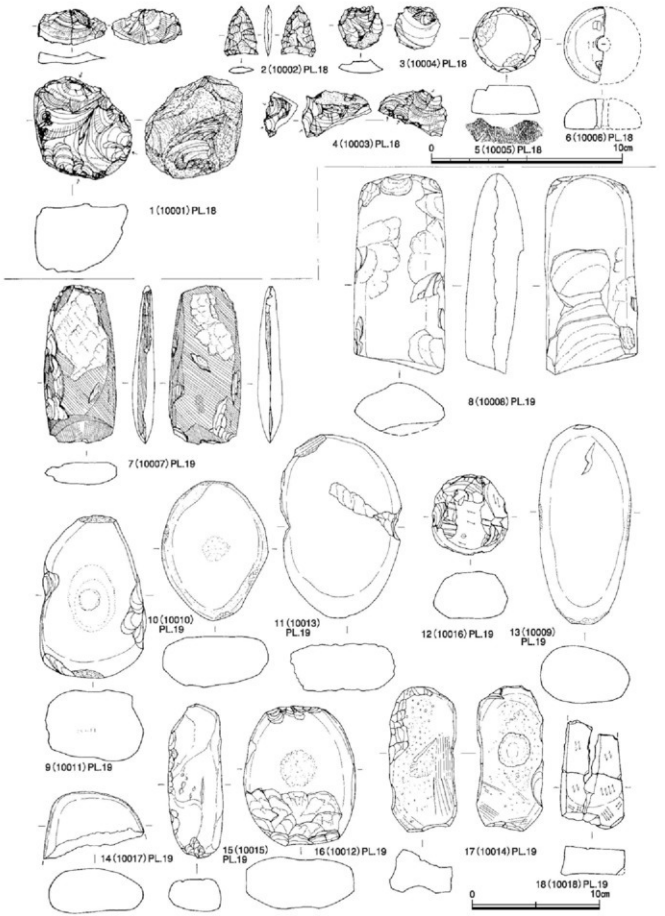


Fig.28　出土遺物－14（石器）実測図（縮尺 1/2,1/3）

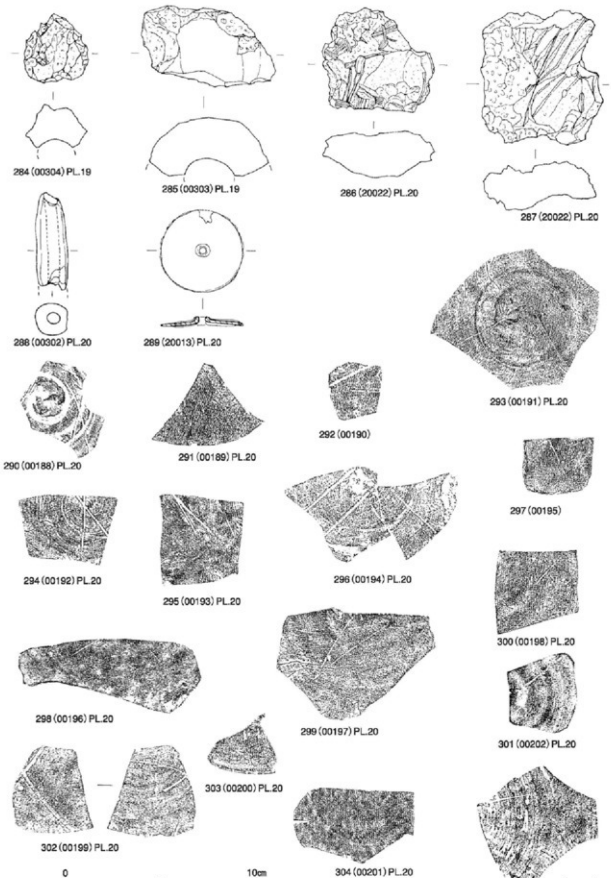


Fig.29　出土遺物－15実測図（縮尺 1/2）

Tab. 1　元岡・桑原遺跡群第26次調査鉄滓一覧表

登録番号	区	遺構・包含層	鉄分の有無	点数	備考
011020001	Ⅱ区H・G—12	茶褐色包含層	有	11	未図化
011020002	Ⅱ区F・G—12	茶褐色包含層	有	1	未図化
011020003	Ⅱ区　—	茶褐色包含層	有	1	未図化
011020004	Ⅰ区	遺構検出時包含層	有	1	未図化
011020005	Ⅰ区	遺構検出時包含層	有	11	未図化
011020006	Ⅱ区　—	包含層	有	13	未図化
011020007	Ⅱ区　—	SC-01	有	3	未図化
011020008	Ⅱ区　—	SC-02	有	2	未図化
011020009	Ⅱ区　—	SC-04床面	有	1	未図化
011020010	Ⅱ区F-13	SK-03	有	1	未図化
011020011	Ⅱ区G-13	黒色土包含層	有	1	未図化
011020012	Ⅱ区G-12	茶褐色包含層	有	1	未図化
011020013	Ⅱ区G-13	茶褐色包含層	有	1	Fig.29-289 PL.20
011020014	Ⅱ区　—	Pit-7	有	7	未図化
011020015	Ⅱ区　—	Pit-8	有	7	未図化
011020016	Ⅱ区　—	Pit-9	有	2	未図化
011020017	Ⅱ区　—	Pit-14	有	3	未図化
011020018	Ⅱ区　—	Pit-31	有	7	未図化
011020019	Ⅱ区　—	Pit-48	有	2	未図化

登録番号	区	遺構・包含層	鉄分の有無	点数	備考
011020020	Ⅱ区　—	Pit-60	有	3	未図化
011020021	Ⅱ区　—	Pit-68	有	1	未図化
011020022	Ⅱ区　—	Pit-9炉壁片	無	5	Fig.29 PL.20
011020023	Ⅱ区　—	Pit-60炉壁片	無	1	未図化
011020024	Ⅱ区　—	SC-01	無	7	未図化
011020025	Ⅱ区　—	SC-02	無	5	未図化
011020026	Ⅱ区　—	Pit-8	無	11	未図化
011020027	Ⅱ区　—	Pit-9	無	5	未図化
011020028	Ⅱ区　—	Pit-31	無	1	未図化
011020029	Ⅱ区　—	Pit-37	無	1	未図化
011020030	Ⅱ区　—	Pit-42	無	3	未図化
011020031	Ⅱ区　—	Pit-48	無	7	未図化
011020032	Ⅱ区　—	Pit-49	無	1	未図化
011020033	Ⅱ区　—	Pit-59	無	2	未図化
011020034	Ⅱ区　—	Pit-60	無	5	未図化
011020035	Ⅱ区H・G-12	茶褐色包含層	無	35	未図化
011020036	Ⅱ区F・G-12	茶褐色包含層	無	1	未図化
011020037	Ⅰ区	包含層	無	27	未図化
011020038	Ⅱ区	包含層	無	30	未図化

Tab. 2　今回の分析で石材が推定された市内出土玉類一覧

遺跡名	資料番号	報告書	掲載Fig	出土遺構	資料名	時期	比重	分析箇所	検出元素とそのX線強度(cps)													
									Na	Mg	Al	Si	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	Ni	Rb	Sr	
元岡27次	015310052	909	30-24	SC-24	小玉	古墳後期?	2.82	表面任意		2.09	91.49	170.20	289.90	0.00	11.67	11.88	0.00	79.58		4.54	3.37	クロム白雲母?(Cr濃め)
元岡27次	015310053	909	30-23	Pit-1016	小玉	古墳後期?	2.85	表面任意		2.35	85.99	162.70	276.50	1.73	10.52	26.04	1.86	74.21		4.16	4.37	クロム白雲母
四箇東1次	751910994	未報告		S-227	小玉	縄文?	2.91	緑色部分 白色部分		3.32 1.51	81.79 48.63	171.01 104.56	239.07 37.13	82.10 466.27	29.65 15.77	58.48 22.19	2.72 3.54	76.24 226.32	6.91 1.26	3.30 1.48	2.12 8.02	クロム白雲母
四箇東1次	751910680	未報告		出土地不明	?状耳飾?	縄文?	－－	表面任意		1.97	89.68	172.81	225.98	6.53	4.36	2.39	2.22	201.86	1.88	7.51	5.00	クロム白雲母?(Cr微弱)
四箇東1次	751900687	未報告		E-5V層	垂飾	縄文?	2.75	表面任意		29.24	10.94	248.13	0.89	0.86	1.76	7.29	3.73	319.81	46.78			滑石
老司古墳4次	865813068	209	103-62	3号石室玉群D	管玉	古墳中期	2.87	表面任意		2.39	106.46	202.82	306.08	4.29	6.8	25.08	3.18	61.77		18.33	2.63	クロム白雲母
大原D3次	926505453	481	111-19	8-3区河川	管玉	縄文後期末 ～晩期前半	2.61	表面任意		2.77	75.92	147.10	238.70	16.32	33.96	74.58	1.73	133.20	0.91	2.97		クロム白雲母
大原D3次	926505454	481	111-17	8-3区河川	小玉	縄文後期末 ～晩期前半	2.85	表面任意		3.99	70.25	142.90	206.60	74.54	9.09	66.35	3.07	166.70	3.50	2.83	2.53	クロム白雲母
大原D3次	926505455	481	111-18	8-3区河川	勾玉	縄文後期末 ～晩期前半	2.88	表面任意		1.95	90.91	167.80	283.90	17.47	43.57	51.48	1.29	41.85	2.87	3.71	4.28	クロム白雲母
今宿2次 (14地点)	760100001	75	8	土壙墓?	勾玉	弥生中～後期? (周辺の出土土器)	3.34	緑色部分 白色部分	2.43 2.46	4.99 4.53	31.30 30.13	201.40 187.90	2.90 2.27	277.10 241.10	0.71 1.67	1.57 0.49	3.50 3.55	157.50 149.20	4.08 3.24		54.19 46.14	硬玉
那珂6次 (那珂八幡古墳)	8505-M1	141	未図化	第2主体部割 竹形木棺内	勾玉	古墳前期	3.57	表面任意	4.83	1.77	58.64	230.60	0.31	56.13	0.87	3.10	0.00	84.73	4.97		4.82	硬玉
野方久保2次	8619-飯1	未報告		57号甕棺	勾玉	弥生中期	3.25	緑色部分 白色部分	4.27 2.30	5.10 5.10	40.81 33.82	186.10 196.50	3.71 6.71	167.90 226.80	3.31 3.32	12.71 17.17	1.38 1.55	130.30 164.60	2.34 15.02		11.73 19.63	硬玉
井尻B4次	933501008	412	13-1008	SC-10(SP-1010)	勾玉	弥生後期後半	3.30	緑色部分 白色部分	3.26 4.58	5.45 3.67	39.96 49.97	211.60 202.90	3.79 6.38	160.20 105.20	3.31 22.33	25.27 18.62	0.19 0.00	160.20 117.60	14.42 2.70		66.93 23.58	硬玉
三苫5次 (三苫古墳群B群)	001550004	773	232-13	8号墳	変形勾玉	古墳後期	3.28	緑色部分 白色部分	4.02 3.42	2.48 1.84	53.72 52.62	219.60 206.70	3.28 2.47	61.37 69.38	3.90 1.74	14.64 2.64	1.34 0.33	122.60 102.00	8.93 0.00		7.41 3.12	硬玉
三苫5次 (三苫古墳群B群)	001550013	773	237-6	9号墳	小玉	古墳後期	3.01	緑色部分 白色部分	2.23 4.02	8.96 0.82	27.70 59.30	165.40 315.70	2.15 2.90	34.34 2.75	8.81 4.62	53.55 4.05	5.08 3.92	433.30 10.00	32.99 0.00		6.15 26.11	硬玉
有田36次	800840001	96	73-12	2号甕棺墓土壙	勾玉(半月形)	弥生中期後半	2.59	表面任意		0.93	51.12	274.00	366.20	0.14	8.14		0.33	18.28		114.30		アマゾナイト
今宿5次	970800167	654	22-167	112号甕棺 (混入の可能性有り)	勾玉下半片	弥生前期後半	2.51	表面任意			35.82	202.50	260.90	0.31			4.50	2.84		283.30		アマゾナイト
藤崎32次	023700124	824	33-124	ST-038	勾玉	弥生前期末	2.64	表面任意		1.23	13.82	614.40	6.71	5.24				29.73				玉髄系?

4．元岡・桑原遺跡群第27次調査出土石製小玉の石材について

元岡27次調査では２点の石製小玉が出土しており、既に昨年度報告が行われている。当時、類例の存在までは確認していたものの石材の同定に至らなかったが、その後、１年間という短い時間の中で研究が一気に加速し、新たな知見が得られている。前回の報告では詳細を記しておらず、また筆者がこの石材研究の流れの一部に携わっていたこともあり、改めて、その内容を記すものである。

まず、資料の概要について振り返っておきたい。福岡市登録番号015310052はSC-24からの出土で、径11.20mm、厚さ6.50mm、孔径2.43mm、重量1.17g、同015310053はPit-1016からの出土で、径9.55mm、厚さ5.50mm、孔径2.40mm、重量0.69gである。石材はいずれも深みのある美しい緑色で、部分的に白色の脈が入る部分もある。質感は脂肪光沢を有し、ごく僅かに透明感を持つ。水中重量の測定から得られた見かけの比重は、10052が2.82、10053が2.85と近い数値を示す。蛍光X線による含有元素分析では双方ともマグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、珪素(Si)、カリウム(K)、チタン(Ti)、クロム(Cr)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)などが検出され、特にカリウムやクロムが特徴的に現れる点なども一致しており、分析からも同一の石材であることが容易に推測された。

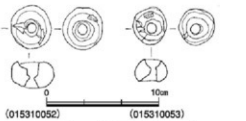


Fig.30　小玉実測図（縮尺 1/1）

古代の装身具に用いられる緑や青緑色の石材には、硬玉をはじめとして、軟玉、碧玉、緑色凝灰岩、蛇紋岩、滑石、珍しいところでは天河石（アマゾナイト）などが知られているが、諸要素の比較でこれらに当てはまるものはなく、同定不能であった。それでも元岡と近隣の福岡市大原D遺跡３次調査出土の管玉、小玉、勾玉（縄文時代後期末～晩期初頭）とは、外観、比重、組成などの点で一致しており、これらと同一の石材であることまではたどり着いていた。そのことなどから、出土遺構や層位は古墳時代後期でありながら、縄文時代の玉が再利用されたり、混入したとの見解を示した。

また27次調査の報告書では、岡村道雄氏や小畑弘己氏からのご教示により、この種の石材が藁科哲男氏によって調査されていることまで言及している。藁科氏は、過去、鹿児島県上加世田遺跡や大坪遺跡、熊本県ワクド石遺跡などで、まとまって出土した装身具に用いられている緑色の石材の分析調査を行い、幾つかの要素から雲母系と推測し、「結晶片岩様緑色岩」との仮称を与えている。そこに示された分析チャートは、元岡27次の玉と同じ特徴を示している。また、その分布から鹿児島県がその供給地になった可能性を量示している（藁科他1994・藁科2005）。

その後、小畑弘己、大坪志子両氏は、縄文時代の装身具に用いられる石材の研究を進める中で、やはり、この緑色の石材に注目し、九州島全域の縄文時代を中心とする装身具石材の調査に着手されたのである。この石材はヒスイ（硬玉）などと誤認されやすいものの、一度その差異に気付けばそれらと異なる特徴を有しており、肉眼でもある程度の分類、抽出は可能と思われる。しかし、より客観的、科学的な判別のため、筆者らと共同で蛍光X線分析による分析を行った。同時に、岩石、鉱物の専門家により、鉱物学的な同定も進められた。これについては九州大学上原誠一郎氏、北九州市立自然史・歴史博物館の森康氏が担当し、各種専門的な調査によって、変成岩の一種である含クロム白雲母岩という結論に至った。この種の石は九州でも長崎など幾つかの産出候補地が存在するようであるが、出土資料の産地同定には未だ多くの調査を要する状況と思われる（小畑他2006）。

出土資料の蛍光X線分析は、九州各県から出土した縄文時代を中心とする装身具やその未製品、原

石など800点強を対象として行った[注1]。これによって、含クロム白雲母岩（以下、クロム白雲母とする）を含む数種の石材について、検出元素の傾向をつかむことができたので、その概要を記し、今後の石材同定の指針としたい。

A：クロム白雲母

外観的特徴としては緑を基調とし、部分的に白や灰色、黄色の夾雑物を有するものもある。若干の透明感を有し、緑色の濃淡、光沢には幾つかの種類がある。比重は概ね2.8前後の値を示す。分析による検出元素は冒頭に記したものの他に、ニッケル(Ni)、ストロンチウム(Sr)など、資料によって出るもの、出ないものがある。また、チタンのK線はバリウム(Ba)のL線と重複する部分が多く分離が困難で、チタン、バリウムそれぞれが単独で含まれる場合、両者が含まれる場合など、複雑な様相が想定される。X線強度ではカリウムが200cps[注1]前後、クロムは30から多いものでは100を超えるものも見られる。しかし、同じ石材でも色調の異なる部分では各元素のX線強度が大きく異なる場合もあり、分析箇所によっては上記の特徴に収まらない場合もある。特に白色の介在物部分ではカルシウムが強くなり、逆にカリウムやクロムは数値が減少する。

またこれとは別に、見た目の特徴はクロム白雲母的でありながら、X線強度値が異なる資料が数種類見られる。一つはマグネシウムや鉄が強いという、後に触れる滑石の特徴と類似するもので、これは共存する鉱物の影響が考えられる。次にカリウムは高い数値を示しながら、クロムが10cps前後かそれ以下の低い数値を示すもので、色調は灰色を呈している[注2]。これらは他と比べてやや透明感が高く見える。逆にクロムは強いのにカリウムが弱い（10cps以下）特徴を示す一群も見られる。これらはいずれも珪素の値が強く（500cps前後）、アルミニウムが弱い（一般的クロム白雲母では70cps前後がカウントされるが、ここでは15cps前後）特徴も共通している。雲母の構成元素であるカリウム、アルミニウムが低いことは、雲母の含有率が低い可能性が想定されよう。

B：ヒスイ（硬玉）

透明感を持った鮮やかな緑色から白、灰色の混じるもの、逆に緑がほとんど入らないものまで様々。比重は3～3.5程度を示す。検出元素の特徴としては、小さいながらも明瞭なピークとしてナトリウム(Na)が含まれること、アルミニウムやカルシウムが強いことなどが挙げられる。またニッケルやストロンチウムも強弱はまちまちであるが、共通する検出元素といえる。

C：アマゾナイト（天河石）

微斜長石で青色に発色するものがアマゾナイトとされる。濃淡はあるものの、鮮やかな青～青緑の色調を特徴とする。比重は2.6前後である。分析ではアルミニウム、珪素、カリウム、ルビジウムが明瞭なピークとして現れる。特にルビジウムは100cpsを超えるものがあるなど、他の石材では見られないほど強く検出される。その他は５～12keVの部分に同定不明な散乱X線と見られるピークが乱立することも特徴的である。

D：滑石

半透明の脂肪光沢や比重が2.8前後の値を示す点ではクロム白雲母に類似するが、色調が黒の他、灰色を基調としながら黄色や薄緑味を帯びるなど異なっている。分析の結果ではマグネシウムや鉄が強く現れ、マグネシウムは二桁以上（20～40cps）、鉄は500cps前後かそれ以上になるものも少なくない。他、ニッケルが含まれるものも多い。また前に記したように、これらの特徴を有しながら同時にクロムが高い値（50cps程度）を示すものがあり、この様な資料は深い緑色を呈し、中には外観がクロム白雲母と識別が難しいものも認められる。

E：碧玉

夾雑物の少ない緻密な質感である。緑を基調としながらも、青みがかったもの、色が深いもの、淡いものなど幾つかの種類がある。比重は2.5前後。分析では珪素、カリウムが強く、他にアルミニウム、カルシウム、チタン、鉄、ルビジウムが検出される。カルシウムが強めに現れる資料では、同時にストロンチウムが検出される。

この他、上記に当てはまらないものも少なからず見られたが、岩石の場合元素分析のみでの同定は困難であり、より専門的な調査を要することから、今回、それ以上の同定は行っていない。また市内出土資料では、老司古墳の玉類にクロム白雲母が含まれていたことは、意外な発見であった。本資料は他の管玉とは異質な形態を呈する。元岡27次例を含め、三苫５次（三苫古墳群B群）出土の硬玉製玉など、材質あるいは形態などが古墳時代に通有ではないものが散見されており、玉類が再利用された状況が想定されよう。

全体的な印象として、硬玉、碧玉、アマゾナイトについては外観や分析結果から比較的明確に分類が可能であるが、クロム白雲母や滑石、その他とした資料の中にはそれぞれ中間的要素を有するものがあり、線引きが困難であった。特に分析箇所による差異も無視できないものがあり、同種の石材内での更なる細分にあたっては注意を要する。また、クロム白雲母でも着石的な要素を持つもの、クロムの含有量が少ないもの、クロムは多いがカリウムが少ないものなどの、どこまでがクロム白雲母として区分し得るのかなどは鉱物学的な検討を要する今後の課題である。

小畑氏らはこれらの調査を元に縄文時代装身具に用いられた石材について、時期別にみた石材組成とその変遷などの検討を行い、縄文時代後期後半に大きな画期を見いだしている。その中ではクロム白雲母が大きなウエイトを占めている。また、これまで発掘調査報告書で目視により記されていた種別を元にした組成比と比較すると、これまでクロム白雲母の認識がなかったこともあってか、その内容は大きく異なり、様相が一変したといっても過言ではない状況である（小畑他2006）。ここではその詳細には触れないが、石材の種類は産地や流通の問題とも密接に関わるもので、安易な同定は誤った研究に導く危険を内包していることは看過できない。以前に比べれば文化財用の蛍光X線分析装置が普及しているといえる現在、経験を積んだ目と、これら装置の活用によって、研究がより正確な方向に進むことを期待するものである。（比佐陽一郎）

（註1）資料は一般的な水洗を経たと見られる状態で、分析に伴う二次的な洗浄や細かい点検は行っていない。汚れなどの部分は避け、オリジナルな表面が露出した部分を選定。完全非破壊による表面分析である。装置はエネルギー分散型微小領域用のもの（エダックス社製／Eagle μ plobe）を用い、分析条件は、対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧：20～40kV・電流：任意／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3mmφ／測定時間120秒で行っている。0.3mmという測定範囲は非常に狭く、平均的な組成を見るには不向きであるが、逆に部分的な違いを見ることができるという利点がある。資料の点数が多いため資料1点につき1カ所の分析であるが、部分的に見た目が大きく異なる場合などは複数箇所を対象とした。分析結果は本来、標準資料で校正した定量値で表現することによって、他の分析機関において同様の手法で得られたデータと比較することも可能になる。しかし今回は標準資料を用いておらず、その状態で装置に組み込まれた機能による定量値を示すと、無用な混乱を来す恐れがあることから、検討にはX線強度（cps：count per second）を使用した。

（註2）改めてデータを見直すと、元岡27次の0153100S2はクロムの少ないグループに区分される。

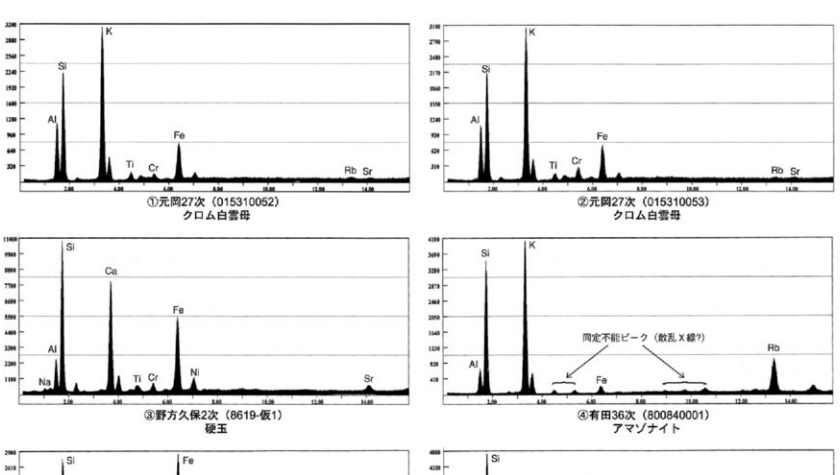


Fig.31　市内出土石製装身具の分析チャート

【参考文献】
小畑弘己・大坪志子・比佐陽一郎・上原真人・一瀬和夫　2005「蛍光X線分析による九州縄文時代石製装身具の生産システムの解明」『平成16年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書』
金関恕・佐原眞編　1993『弥生文化の研究　第10巻　弥生人とその環境』　雄山閣
佐原眞　2005「大甕埋葬論の今と将来の文化財調査」『大甕遺跡　九州新幹線建設地点』
高倉洋彰　1995「大甕埋葬成立の背景」『大甕遺跡　九州新幹線建設地点』
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2000『縄文人の食卓』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2001『縄文人の食卓2』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2002『縄文人の食卓3』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2003『縄文人の食卓4』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2004『縄文人の食卓5』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2005『縄文人の食卓6』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2006『縄文人の食卓7』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2007『縄文人の食卓8』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2008『縄文人の食卓9』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2009『縄文人の食卓10』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2010『縄文人の食卓11』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2011『縄文人の食卓12』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2012『縄文人の食卓13』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2013『縄文人の食卓14』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2014『縄文人の食卓15』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2015『縄文人の食卓16』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2016『縄文人の食卓17』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2017『縄文人の食卓18』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2018『縄文人の食卓19』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2019『縄文人の食卓20』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2020『縄文人の食卓21』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2021『縄文人の食卓22』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2022『縄文人の食卓23』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2023『縄文人の食卓24』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2024『縄文人の食卓25』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2025『縄文人の食卓26』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2026『縄文人の食卓27』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2027『縄文人の食卓28』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2028『縄文人の食卓29』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2029『縄文人の食卓30』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2030『縄文人の食卓31』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2031『縄文人の食卓32』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2032『縄文人の食卓33』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2033『縄文人の食卓34』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2034『縄文人の食卓35』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2035『縄文人の食卓36』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2036『縄文人の食卓37』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2037『縄文人の食卓38』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2038『縄文人の食卓39』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2039『縄文人の食卓40』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2040『縄文人の食卓41』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2041『縄文人の食卓42』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2042『縄文人の食卓43』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2043『縄文人の食卓44』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2044『縄文人の食卓45』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2045『縄文人の食卓46』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2046『縄文人の食卓47』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2047『縄文人の食卓48』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2048『縄文人の食卓49』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2049『縄文人の食卓50』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2050『縄文人の食卓51』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2051『縄文人の食卓52』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2052『縄文人の食卓53』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2053『縄文人の食卓54』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2054『縄文人の食卓55』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2055『縄文人の食卓56』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2056『縄文人の食卓57』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2057『縄文人の食卓58』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2058『縄文人の食卓59』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2059『縄文人の食卓60』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2060『縄文人の食卓61』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2061『縄文人の食卓62』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2062『縄文人の食卓63』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2063『縄文人の食卓64』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2064『縄文人の食卓65』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2065『縄文人の食卓66』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2066『縄文人の食卓67』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2067『縄文人の食卓68』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2068『縄文人の食卓69』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2069『縄文人の食卓70』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2070『縄文人の食卓71』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2071『縄文人の食卓72』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2072『縄文人の食卓73』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2073『縄文人の食卓74』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2074『縄文人の食卓75』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2075『縄文人の食卓76』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2076『縄文人の食卓77』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2077『縄文人の食卓78』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2078『縄文人の食卓79』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2079『縄文人の食卓80』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2080『縄文人の食卓81』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2081『縄文人の食卓82』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2082『縄文人の食卓83』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2083『縄文人の食卓84』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2084『縄文人の食卓85』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2085『縄文人の食卓86』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2086『縄文人の食卓87』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2087『縄文人の食卓88』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2088『縄文人の食卓89』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2089『縄文人の食卓90』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2090『縄文人の食卓91』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2091『縄文人の食卓92』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2092『縄文人の食卓93』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2093『縄文人の食卓94』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2094『縄文人の食卓95』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2095『縄文人の食卓96』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2096『縄文人の食卓97』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2097『縄文人の食卓98』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2098『縄文人の食卓99』　九州大学総合研究博物館
田中良之・土肥直美・中橋孝博・谷畑美帆・溝口孝司・小片丘彰・小澤佳憲・清家章・米田穣・藤尾慎一郎・宮本一夫　2099『縄文人の食卓100』　九州大学総合研究博物館

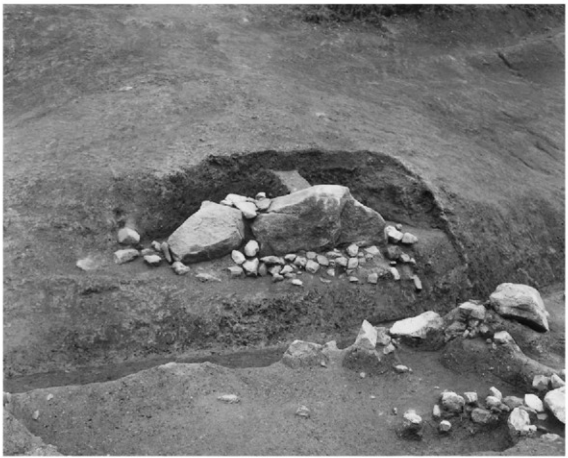
図　版

1．元岡・桑原遺跡群第20・26次調査地点（航空写真）（北東から）

2．第26次調査区全景（航空写真）（西から）

1．第26次調査地点Ⅱ区全景（航空写真）（東から）

2．第26次調査Ⅰ区検出第1号墳（東から）

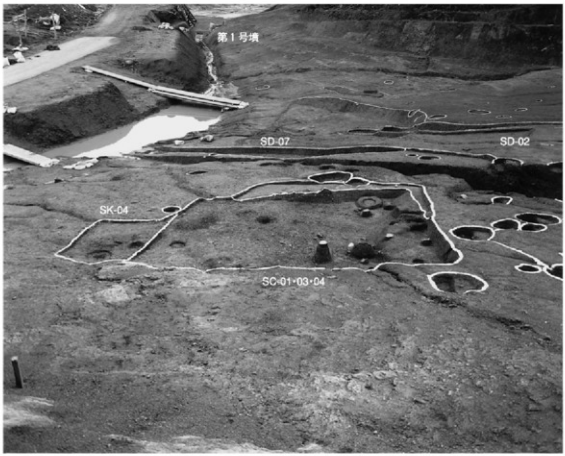


1．Ⅰ区第１号墳左側壁部（東から）

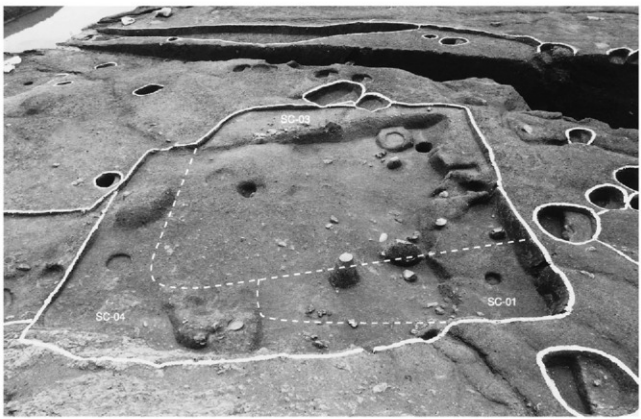
2．第１号墳右側壁部（西から）

1．第26次調査Ⅱ区全景（東から）

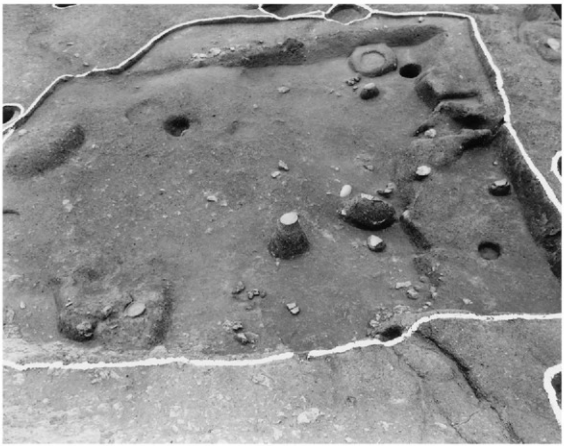
2．第26次調査Ⅱ区第三段目全景（東から）



1．Ⅱ区　SC-01・03・04、SK-04全景（北から）

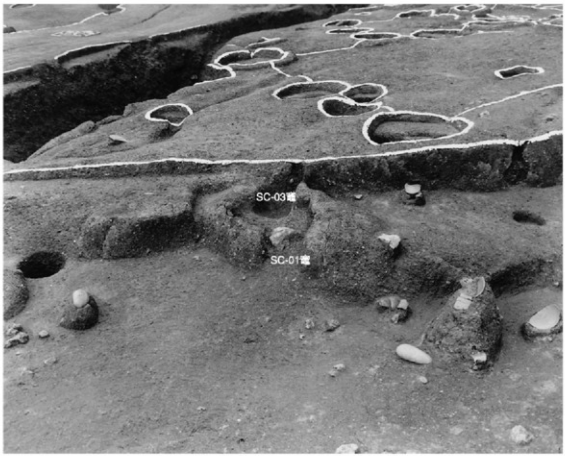


2．SC-01・03・04全景（北から）

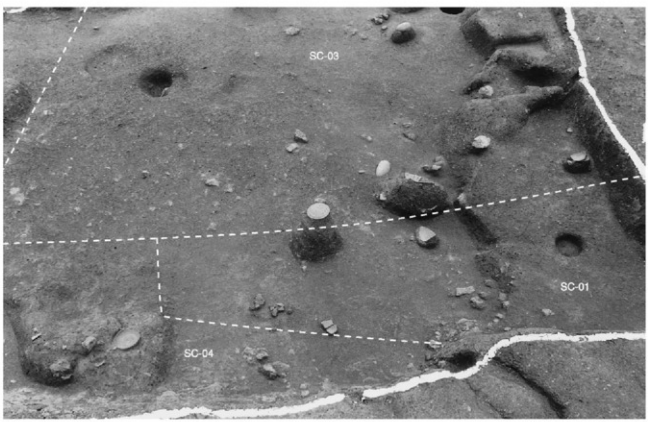


1．SC-01･03･04近景（北から）

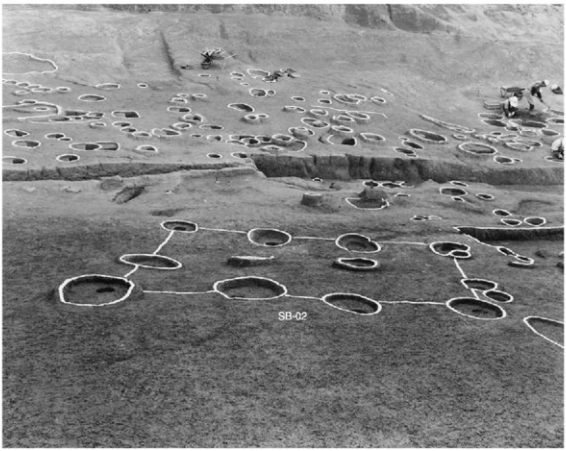
2．SC-04竈近景（東から）



1．SC-01竈近景（東から）



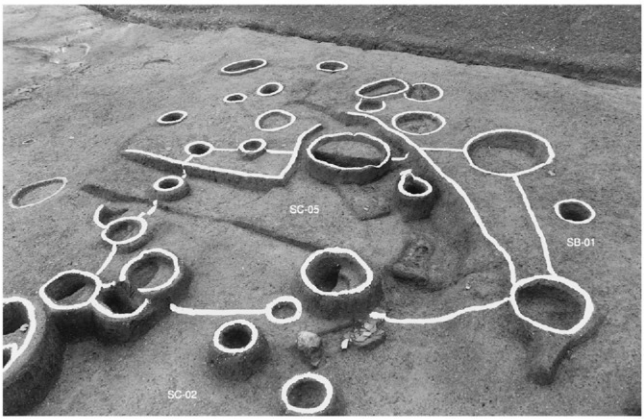
2．SC-01･04切合関係と竈近景（北から）



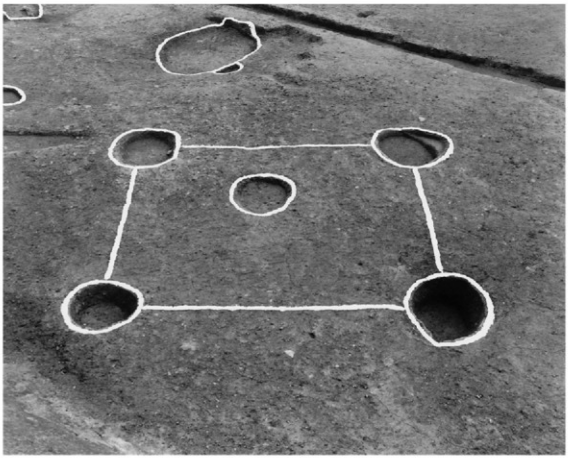
1．ＳＢ-02他検出状態（南西から）

2．ＳＣ-02･05、ＳＢ-01検出状態（南から）

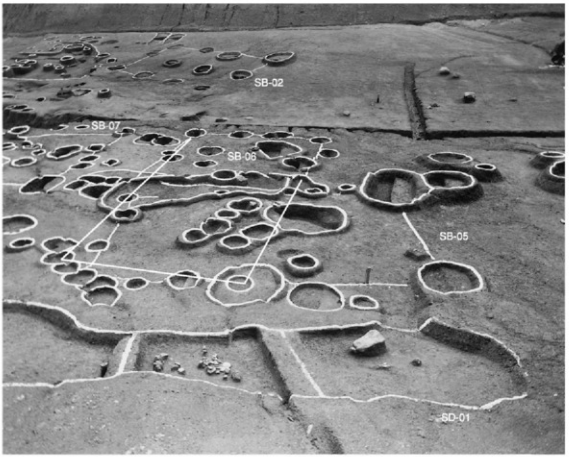
1．ＳＢ-03他検出状態（南から）



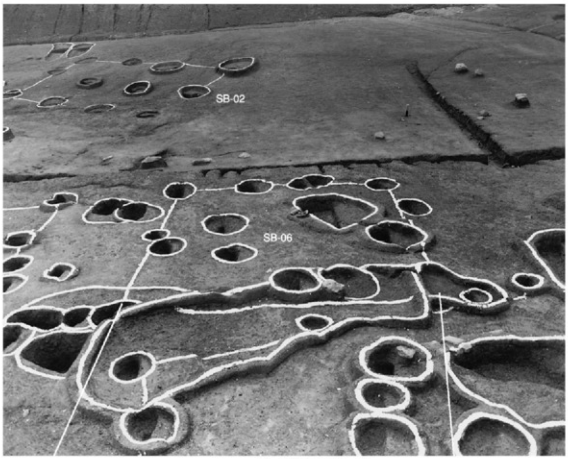
2．ＳＣ-02･05、ＳＢ-01検出状態（北から）



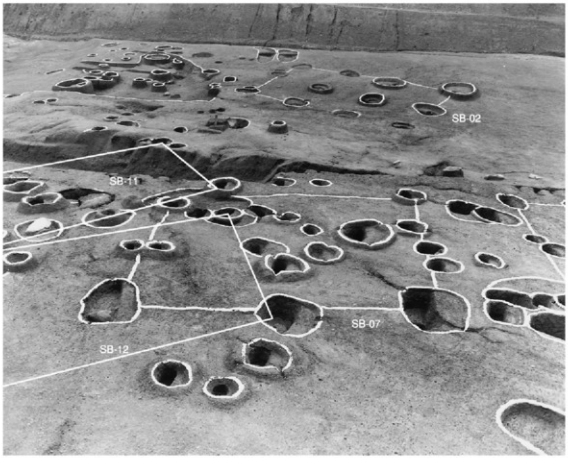
1．ＳＢ-04検出状態（北から）



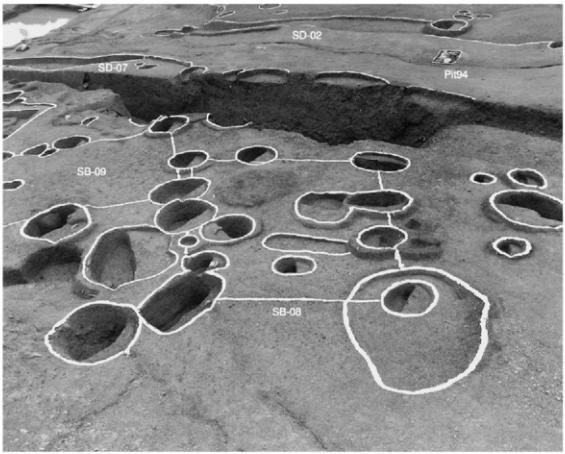
2．ＳＢ-05～07、ＳＤ-01他検出状態（北から）



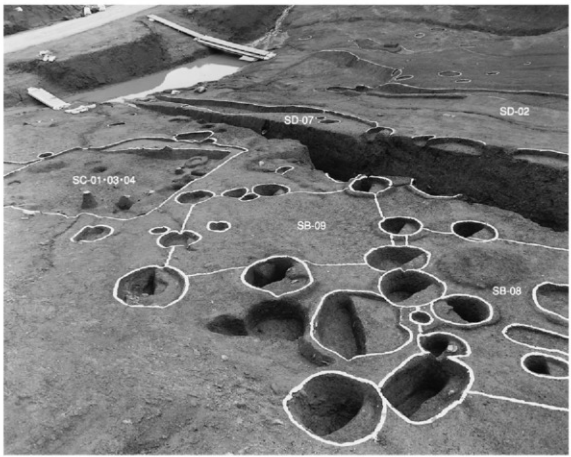
1．ＳＢ-06検出状態（北から）



2．ＳＢ-02･07他検出状態（北から）



1．ＳＢ-08･09、Pit-94他検出状態（北から）

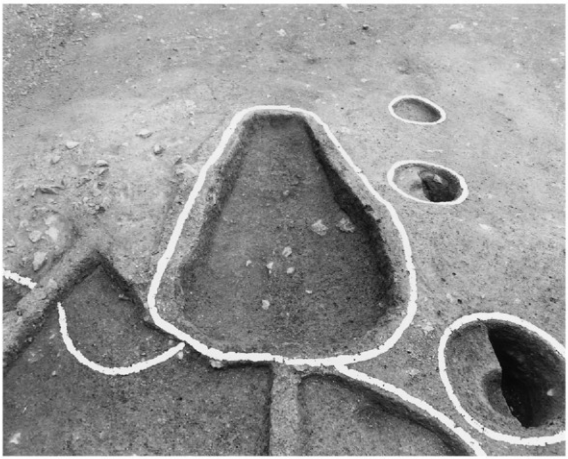


2．ＳＣ-01、ＳＤ-02、ＳＢ-08･09他検出状態（北から）

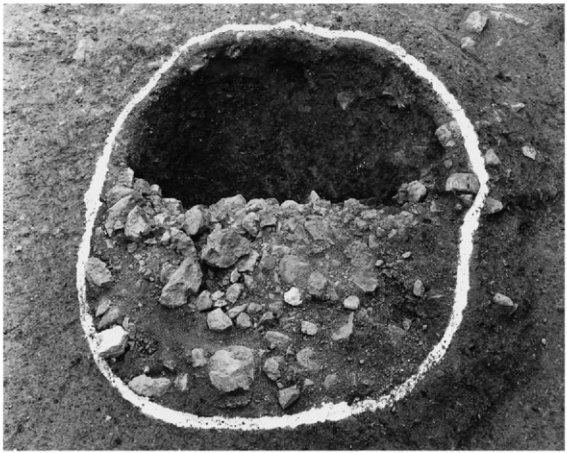
1．護岸状遺構、ＳＢ-10検出状態（南東から）

2．護岸状遺構全景（北西から）

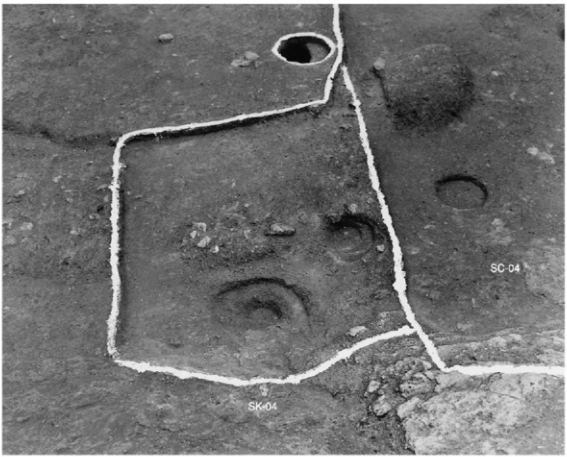
1．ＳＤ-01、ＳＢ-05、Pit-65他検出状態（西から）



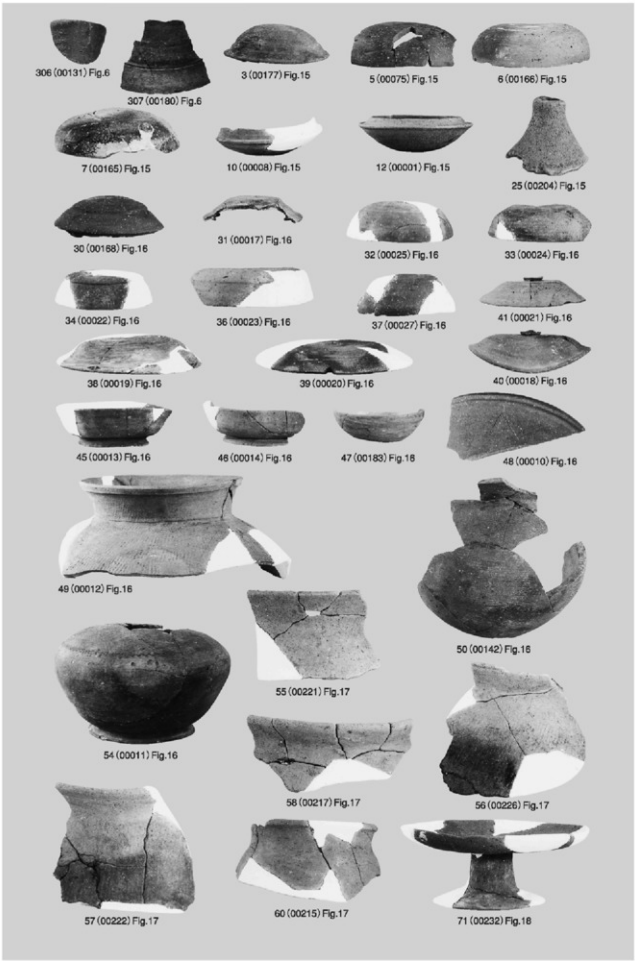
2．ＳＫ-01完掘状態（南西から）



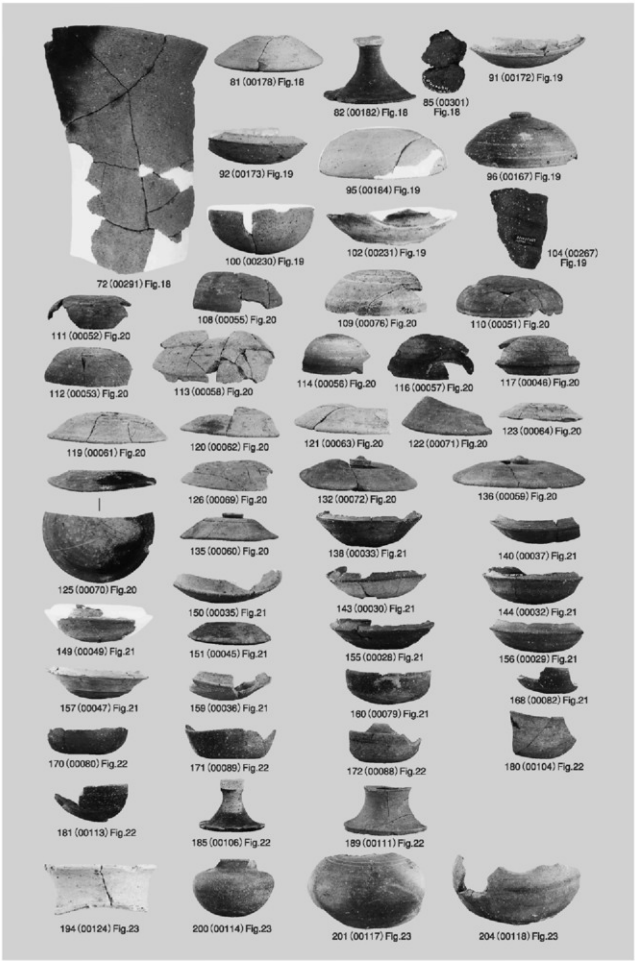
1．ＳＫ-02（石蓋土壙）検出状態（西から）



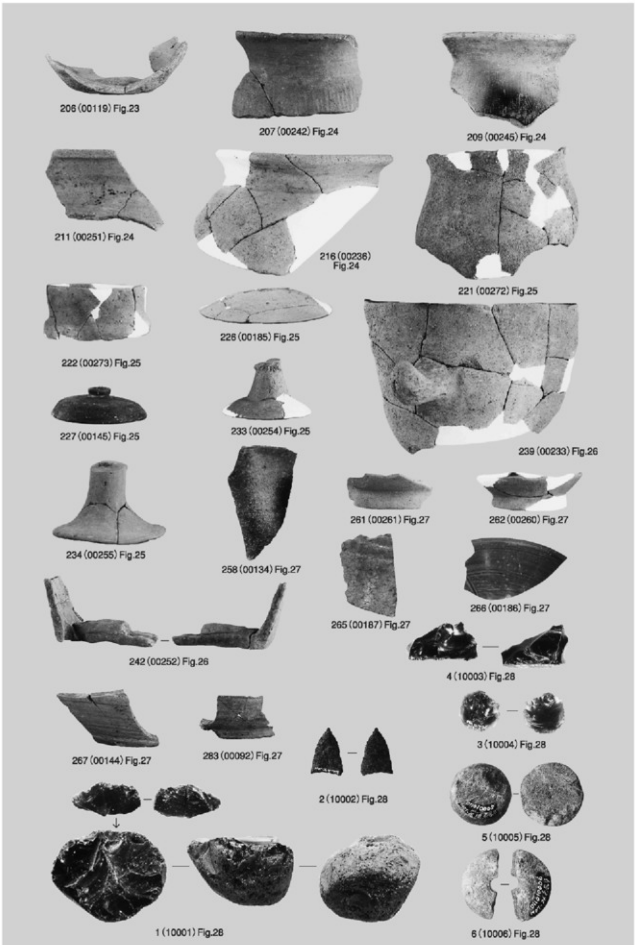
2．ＳＫ-04検出状態（北から）


306 (00131) Fig.6
307 (00180) Fig.6
3 (00177) Fig.15
5 (00075) Fig.15
6 (00166) Fig.15
7 (00165) Fig.15
10 (00008) Fig.15
12 (00001) Fig.15
25 (00204) Fig.15
30 (00168) Fig.16
31 (00017) Fig.16
32 (00025) Fig.16
33 (00024) Fig.16
34 (00022) Fig.16
36 (00023) Fig.16
37 (00027) Fig.16
41 (00021) Fig.16
38 (00019) Fig.16
39 (00020) Fig.16
40 (00018) Fig.16
45 (00013) Fig.16
46 (00014) Fig.16
47 (00183) Fig.18
48 (00010) Fig.16
49 (00012) Fig.16
50 (00142) Fig.16
55 (00221) Fig.17
54 (00011) Fig.16
58 (00217) Fig.17
56 (00226) Fig.17
57 (00222) Fig.17
60 (00215) Fig.17
71 (00232) Fig.18

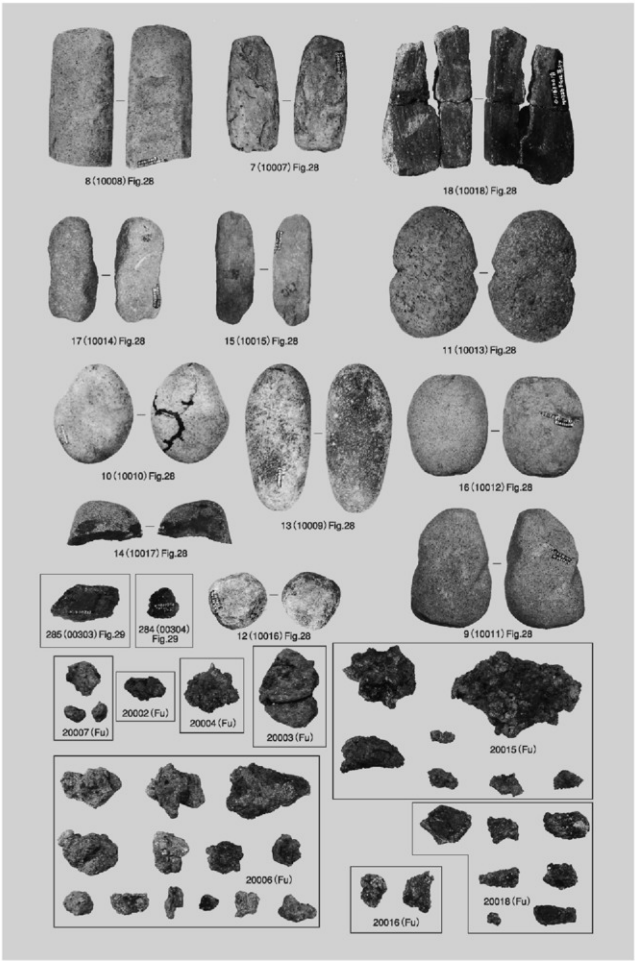
出土遺物ー1 （縮尺1/4）


72 (00291) Fig.18
81 (00178) Fig.18
82 (00182) Fig.18
85 (00301) Fig.18
91 (00172) Fig.19
92 (00173) Fig.19
95 (00184) Fig.19
96 (00167) Fig.19
100 (00230) Fig.19
102 (00231) Fig.19
104 (00267) Fig.19
108 (00055) Fig.20
109 (00076) Fig.20
110 (00051) Fig.20
111 (00052) Fig.20
112 (00053) Fig.20
113 (00058) Fig.20
114 (00056) Fig.20
116 (00057) Fig.20
117 (00046) Fig.20
119 (00061) Fig.20
120 (00062) Fig.20
121 (00063) Fig.20
122 (00071) Fig.20
123 (00064) Fig.20
125 (00070) Fig.20
126 (00069) Fig.20
132 (00072) Fig.20
136 (00059) Fig.20
135 (00060) Fig.20
138 (00033) Fig.21
140 (00037) Fig.21
143 (00030) Fig.21
144 (00032) Fig.21
149 (00049) Fig.21
150 (00035) Fig.21
151 (00045) Fig.21
155 (00028) Fig.21
156 (00029) Fig.21
157 (00047) Fig.21
158 (00036) Fig.21
160 (00079) Fig.21
168 (00082) Fig.21
170 (00080) Fig.22
171 (00089) Fig.22
172 (00088) Fig.22
180 (00104) Fig.22
181 (00113) Fig.22
185 (00106) Fig.22
189 (00111) Fig.22
194 (00124) Fig.23
200 (00114) Fig.23
201 (00117) Fig.23
204 (00118) Fig.23

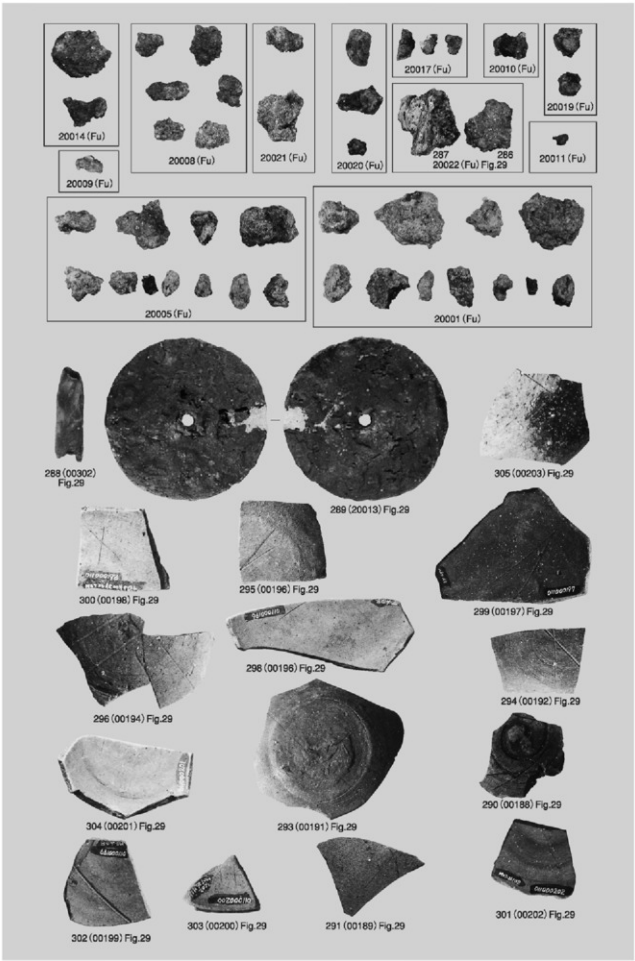
出土遺物－２（縮尺1/4）



出土遺物－３（土器は縮尺1/4、石器は1/2、265は1/1）


8 (10008) Fig.28
7 (10007) Fig.28
18 (10018) Fig.28
17 (10014) Fig.28
15 (10015) Fig.28
11 (10013) Fig.28
10 (10010) Fig.28
13 (10009) Fig.28
16 (10012) Fig.28
14 (10017) Fig.28
9 (10011) Fig.28
285 (00303) Fig.29
284 (00304) Fig.29
12 (10016) Fig.28
20007 (Fu)
20002 (Fu)
20004 (Fu)
20003 (Fu)
20015 (Fu)
20006 (Fu)
20016 (Fu)
20016 (Fu)

出土遺物一 4 （縮尺1/4）



出土土器－５（土器・鉄滓は1/4、鉄器・土錘は1/1）

報 告 書 抄 録

ふりがな	もとおか・くわはらいせきぐん　きゅう
書名	元岡・桑原遺跡群9
副書名	九州大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告書　－第26次調査－
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第963集
編著者名	二宮　忠司、大庭　友子
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神１丁目８番１号　　TEL.092－711－4667
発行年月日	西暦2007年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
もとおか・くわはら 元岡・桑原 いせきぐんだい 遺跡群第26次	ふくおかしにしくおおあざくわはらあざ 福岡市西区大字桑原字 とやま 戸山472外	404130	2782	33″ 35′ 43″	130° 13′ 43″	2001. 04.6～ 2001. 11.30	5,487㎡	九州大学 統合移転に 伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元岡・桑 原遺跡群 第26次	古墳・集落	古　墳 奈　良 平　安	古墳時代 横穴石室　　1 住居址　５軒 奈良・平安 掘立柱建物12棟他	須恵器 土師器 陶磁器 石器	

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群９

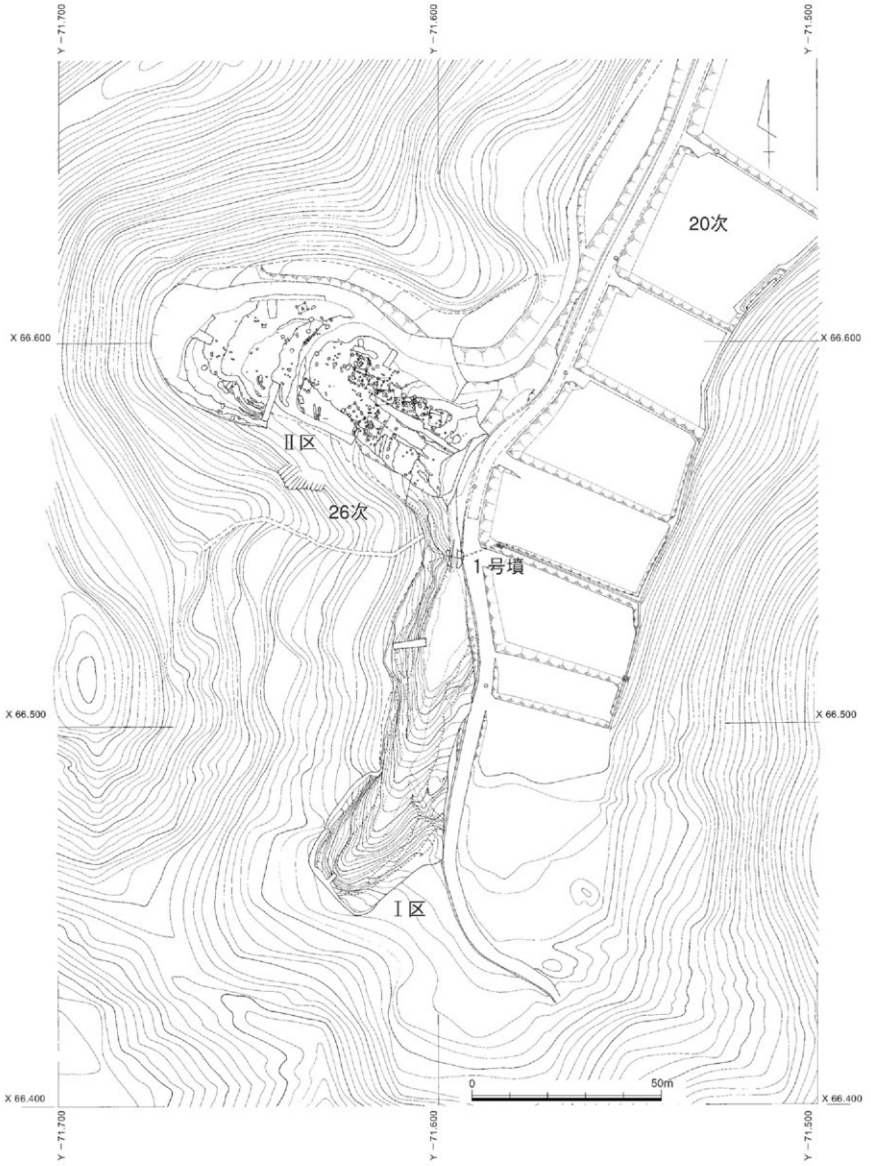
－第26次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第963集

2007年（平成19年3月30日）

発　行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神１丁目８－１

印　刷　松影堂印刷株式会社
　　福岡市博多区吉塚５-13-40



付図　元岡・桑原遺跡群第26次調査遺構全体図（1/1,000）
福岡市埋蔵文化財調査報告書第963集 元岡・桑原遺跡群9